

# エゾアツ



2012 冬季号 99

北海道ボランティア・レンジャー協議会

# 目 次

99号 2012年1月26日

- 1 巻頭 「地球型惑星発見」に思う 会長 春日 順雄
  
- 2 自然観察会などから
  - ・北広レクの森観察会 札幌市 松田 ハル子
  - ・小樽名所巡りの自然観察会に参加して 小樽市 加藤 キイ
  - ・西岡公園 自然観察会に参加して 江別市 大表 順子
  
- 3 育成研修会
  - ・ボラ・レン育成研修会 (受講者の思い) 研修部 菅 美紀子
  - ・ボラ・レン育成研修会に参加して 美唄市 嵯峨 和樹
  - ・ " (D班にふれ) " "

\*佐野亮二さん「北海道産業貢献賞」受賞の紹介
  
- 4 連載
  - ・美々川源流を訪ねて 苫小牧市 谷口勇五郎
  
- 5 小樽支部
  - ・2011年度 夏期小樽支部行事報告 小樽支部長 北原 武
  
- 6 研修 報告 事務局便りなど
  - ・東日本大震災 その後の相馬市の現況について 札幌市 菅 美紀子
  - ・リクリエーション エドワード・グレイ著 札幌市 清水 利章  
(翻訳)
  - ・写真 クマゲラの生態 札幌市 牧 茂

\*清水さん論文 (24ページ) の途中にく牧さんのクマゲラ>の写真挿入。カラー写真は別紙に印刷し、真ん中のページ (22-23) に挿入しなければならないので、こうした編集になりました。

  - ・NOW 5号
  - ・事務局便り

<編集後記>

## 「地球型惑星発見」に思う

春日 順雄

米航空宇宙局(NASA)は、昨年12月5日 生命に欠かせない水が液体で存在し得る惑星をケプラー宇宙望遠鏡による観測で確認したと発表した。米メディアによると惑星の地表付近の平均気温は推定で摂氏22度。組成は不明だが、NASAは「地球型惑星の発見に一歩近づいた」としている。

惑星は、地球から600光年離れており、大きさは地球の2.4倍「ケプラー22b」と名付けられた。太陽よりもやや小さく温度の低い恒星から適度に離れた軌道を、約290日周期で好転している。

ケプラー宇宙望遠鏡は、太陽系の外側にある惑星と見られる天体を、これまでに2326個発見。このうち48個は恒星との距離などから水が液体で存在する可能性があるが、実際に惑星であることが確認されたのはケプラー22bが初めて。

このニュースを受けて、ネットの書き込みにも以下のように、愉快で希望溢れるものが沢山ありました。

- ・「ちょっと、その惑星の土地、買って来る。」
  - ・「そんな条件のいい物件に、先住民がいないと思うほうがおかしい。」
  - ・「向こうから見られているとしたら、1400年頃の地球を見られている訳か。日本の室町幕府の頃を見られてる？」
  - ・「いいな、なんか夢がある。なんかそんな気がする。宇宙って不思議！」
  - ・「光より速い速度でいけば、大したこと無い距離だ！」
  - ・「もうすぐだな人類発展の進歩は、ニュートリノも光速以上だと発見されたことだしな。」
  - ・「600光年で宇宙全体を見れば、かなりのご近所さんだろうけどやっぱ現実的じゃないな。」
  - ・「世代交代しながら移動できる宇宙船が必要だ。」
  - ・「600光年じゃ、ワープ航法しかないな。科学者の皆さん、早く波動エンジンを作ってよ。」
- など。

ワープ航法か。SFアニメ「宇宙戦艦ヤマト」を思い出しました。「時は、2199年地球は正体不明の敵から放射能を含む遊星爆弾の攻撃を受け、放射能汚染が進み、人々は地中生活を余儀なくされています。そこに、14万8千光年の彼方のイスカンダル星のスターシャから波動エンジンの設計図が届きます。波動エンジンを装備した宇宙戦艦ヤマトは、放射能防除装置コスモクリーナーDを受け取るべく困難を乗り越えて往復29万6千光年のイスカンダル星へ旅立ちます。人類の余命は一年。宇宙戦艦ヤマトは一年の航海を終えて地球に帰還します。」ワープ航法の研究をしている物理学者もいると聞いてビックリしたこともありました。

私はこの惑星に酸素があるのかな。このことが気がかりです。というのは、地球に現在のような大気が誕生するには、途方もない年月と生命誕生のストーリーを秘めているからです。

地球は、46億年前に誕生しました。その頃の原始大気は、水素・ヘリウムなど軽い気体から出来ていました。それらは、数千万年のうちに強力な太陽風によって宇宙空間に吹き飛ばされてしまいました。

その後、地球は高温時代を迎えます。火だるま状態です。重い鉄などの元素は引力によって地球中心に沈み込みます。そして、岩石中に含まれていた水、その他の気体成分が空中に放出されます。地球の冷却化と共に火山活動が活発化します。この活動によっても水や気体成分が大気中に放出され原始大気が誕生します。二酸化炭素が大部分、そのほかに、一酸化炭素、窒素、アンモニア、水蒸気から成り立っていました。

さらに、地球は冷却していきます。そして、表面が岩石になっていきます。地殻の誕生です。大気中の水蒸気が雨となって降り注ぎ、地殻中の塩などの水溶成分を溶かし込んで低地に流れ込み、40億年前に原始海洋が誕生します。

大気中には酸素がありませんからオゾン層もありません。地上には紫外線や宇宙線が降り注ぎ、原始海洋は酸性でしたから、生物が生活するためには過酷な環境です。このような状況のなかで、生命発生のドラマは海中から始まります。

2011年7月17日、NHKスペシャル「深海大探査 生命誕生の謎にせまる」が放映されました。生命誕生のふるさとを求めての科学者の研究活動の話でした。観測船「ちきゅう号」と「なつしま」は沖縄トラフの海底1500メートルの熱水噴出口周辺でボーリングを行い試料を採取しました。熱水の噴出口の温度は319度。噴出口に至る熱水の通り道はもっと高温です。その採掘物の中に、金・銀・銅・亜鉛・レアメタルなどを含む黒い層（黒鉱）が含まれていました。そして、古細菌特有の遺伝子の一部を採取しています。

黒鉱を触媒として無機物から生命の誕生に必要なアミノ酸などが高温・高圧の深海の熱水噴出口周辺で生成される。そして、40億年前（±2億年）原始生命が誕生したと考えられています。38億年前（±3億年）には真正細菌と古細菌が出現します。これらの生物は硫化物を分解してエネルギーを得るなど、現在の地球上の生物とは、まったく違う側面を持っています。もちろん、酸素に触れたりすると死んでしまうものです。

32億年前、光合成をする藍藻類（シアノバクテリア）が出現します。シアノバクテリアの光合成によって酸素が発生するようになります。発生した酸素は、大気中の一酸化炭素の酸化や誕生したばかりの地殻の岩石などの酸化、さらには、海洋中の鉄イオンの酸化に使われますから、大気中にまで酸素が供給されない状態が続きます。

27億年前、シアノバクテリア大量発生。シアノバクテリアが作り出す酸素は海水中の鉄イオンの酸化のために使われます。この頃の海は、酸化鉄のために赤茶色に濁っていたのでは無いですか。そして、渚など波の穏やかなところに堆積して大規模な縞状鉄鉱層が形成されました。厚さ数百メートル、長さ数百キロメートルのものもあります。25億年前頃のことです。現在の鉄鋼業に使用する鉄鉱石のほとんどは縞状鉄鉱石です。偉大な自然の営みに驚きです。

このような酸素の消費が一段落して、いよいよ大気中に酸素が供給され始めます。オゾン層も形成されます。紫外線と宇宙線の強力なバリアが完成します。現在のような生物が存在できる環境が整って来るわけです。21億年前の頃です。植物の光合成の働きで現在のような大気が形成されたのです。植物ってすごいですね。大気中の酸素は植物の光合成に起因するのです。

地球型の惑星発見は明るく、何か可能性を予感させるものです。でも、酸素はあるのかな、そして、600光年は遠いです。かけがえない地球で25億年の歳月をかけて形成された現在の地球。600光年の彼方でもこのようなドラマは進行しているだろうか。

やはり地球は「かけがいのない地球—Onlyone Earth」であります。

## 北 広 レ ク の 森 観 察 会 6月13日

札幌市 松田 ハル子

週に一度配布される近所の広告紙でボラレンの「北広レクの森観察会」を知り出掛けた。数年前に何かの観察会で場所は知りながらも森内の道が分からずで、たまたま機会に恵まれたと勇んでの参加。足元の植物ばかり追いかけ、案内の方に道はお任せ相変わらずながら。

29度の日中は全くそれを感じさせない。木々が自然を愛でる人間に微笑みかけているように涼やかだ。ハルゼミの抜け殻！ それも一本の木の目線に五匹分も。小さなセミ 時計の大きさを敬いながら、下見の方が印されたササバギンランの清楚な立ち姿。シウリザクラの筒状の咲き方の愛らしさ。サカネランの数本。光合成を必要しない。木漏れ日が少し。尤もランらしい咲き方だと思えるコケイランも時々現れてくれる。

オシダは春も好きだが、秋に他木の葉がどんとたまり、オシダ龍になる様を特に最層にしている。シシガシラはかなり自身があったのに今日は不振。場所で異なるのだろうか？

見上げたホウノキ。大葉が空に向かって重なり濃淡色をつくっている。カツラは春の暗紅色から葉の形をはっきりさせ、子孫を携えて風に揺れている。タニギキョを踏まれないように気をつけながら大好きなミズキにフラつく。

久しくトチバニンジンに出会う。うまいこと命名したもので葉がトチノキの葉に似ることから図鑑で読んだ記憶が新らしい。

いくつかのグループに分かれての観察会なのですれ違う、追いつく、追い越される。写真を撮っている人の顔をこちらが撮ってあげたいような真剣な顔。今持っているパワーをすべてこのカメラに――。

私はといえば心のカメラにかなりの枚数を一と、満悦。

折角のコース印した地図をいただきながら返すがえすも林道は二の次という粗末。

先を歩くグループの足が止まり視線を移すと小(子)株のサルメンエビネ。案内されている人生の先輩が淋し気に笑んでゼスチャーした。

盗掘という“卑しい”人間の行為が一。自然の素晴らしさを共にとの想いでボラレンの方々。

維持は至難、破壊は至極簡単。この現実のなかで小さい足元の一步から「私達はここが一番好きなの！」言葉を持たない野の花の叫びに智恵あるはずの人間は目を耳を傾けなければ。使命、豊さを思わずにはいられない。

## 小樽名所巡りの自然観察会に参加して

小樽市 加藤 キイ

2011, 10, 18

月浦山、宗圓寺の五百羅漢像は、30年くらい前に小樽市の歩こう会で二度ほど行って見た事がありました。その時は薄暗い室の中に、あちこち、いたんだ仏像が並べてあり、ちょっと不気味な光景でした。今回行って驚いたのは、以前の場所の隣に、高床式建物ができていて、その中に修復された仏像が整然と並べられて居ることでした。年代ものの仏像で、一体、一体の表情が皆違い、また穏やかな表情に見えたのは、私が年を取ったせいでしょうか。

仏像を守っている住職の並大抵でない努力の賜物でしょうか。

寺の横にも大きい仏像が建てられ、その周りの植物が紅葉して、とてもきれいでした。

寺から出て、旧道の坂道を歩いて、潮見台浄水場へ、そこから少し行ったところに小高い岡があって、そこで休憩、以前は、眺めが良かったそうですが、今回は草や木が、ぼうぼうで、残念ながら何も見えなかった。

そこから、送電線の下を歩いて、奥沢墓地に着くまで、木の実をつまんだり、紅葉を眺めたり、植物の話の話を聞いたりして、山歩きを楽しみました。

墓地に着きました。小林多喜二の墓は、急斜面の上の方にありました。多喜二が、小林家の墓を建てるようにと、母に送ったお金で建てた、そのお墓に、母より先に入ることになるろうとは、よもや思ってもいなかったでしょうね、左翼に対する弾圧が強まる中でも作家活動を続けたが、特高警察に拷問の末虐殺された、あまりにも悲惨な最期でした。近年、多喜二の墓を訪れる人が多いとありますが、あの世へ行ってから有名になって、心の安らぎをとりもどしているのでしょうか。

墓をお参りした後、珍しい木（ギョリュウ）を皆で見て、和光荘へ、途中、真っ直に伸びた木（イチョウ）が、とてもきれいな黄色でした。和光荘は、白い洒落た洋館の建物で中は見ることは出来ないけれど、お庭を見る事が出来ました。広い庭には、いろいろな植物があり、赤や黄に色づいて、とてもきれいでした。

色々な事を見聞できて、充実した一日でした。ありがとうございました。



天気予報を気にしながら迎えた当日、快晴ではありませんが恵まれたお天気の中管理事務所の前に集合しました。ノスリだとの声に上空を見上げると高く高くノスリが舞い上がっていきました。10時過ぎに道場自然解説員の先導のもと8人くらいの班で出発しました。右の階段を下りた松林でエゾリスを見つけました。尾をピントあげエサを探しているのでしょうか、それとも鬼ごっこをしているのかな？お腹の白さがとても素敵です。

階段を下り沼に出ました。水鳥がいますが誰でしょう。オスとメスのマガモが此方へむかって泳いでいます。なかよさそうに一緒ですがオンドリなどと共にパートナーを毎年変えると聞き少々がっかりです。キンクロハジロはくちばしを羽の中にかくし波間を漂いながらおやすみです。こちらもビックリですが足は休むことなく水をかいているそうです。

向こうのほうに5～6羽の群れで誰かいます。カワアイサがもぐりながらエサをさがしています。1羽がもぐると順番に皆が整然と時間差をとり続きます。こちらもオスが断然の見分け方も教えていただき次回からは分かるかしらと少しお利口さんになった気分です。ここで、道場解説員の新兵器の登場です。太い鉛筆状のものを図鑑にあてると鳥の声が聞こえてきます。色々の鳥の声を聴かせていただき満足しながら先へ進みます。

糊空木が枯れた花を落とさずにがんばっていました。花の時期もいいですが枯れた様もなかなか風情がありますね。昔は和紙用の糊を取っていたこと、中が空洞になっているが非常に丈夫なのでパイプの材料に使ったこと、獣をとるための矢尻の材料としたことなど熊野解説員が教えてくださいます。いつもながら的確な説明に魅せられます。

沼の反対側へでました。つい最近までカワセミが見られたそうですが残念ながら今日はお目にかかることはできませんでした。

その先に大きな山葡萄が天辺に実を残しています。ここで口をあけて待っていたら熟したおいしい実が落ちてくるかもしれないと思っていると、鳥のために残しておいてあげようと、どなたかの優しい言葉が耳に入ってきました。

木道にでると昨夜の雪で歩きにくそうにみえましたが滑ることもなく快適です。毛山様の木を見上げると冬芽がそろってお目見えです。その横には小豆なしが赤い実をたくさんつけて鳥たちを誘っています。

上り坂の途中でゴジュウカラ、コゲラと出会いましたが食事中的ようで木の上から下へと忙しそうに美味しいものを捜しています。本格的な冬の来る前に栄養をしっかりとつけて厳しい冬をのりこえるのでしょうか。

自然は素晴らしいけれど厳しさもあります。私は長靴で参加しましたが、足が冷たくなり次回は考えなければと思いました。私たちも自然の中の一員として謙虚に日々を過ごさなければと考えさせられる大切な一日となりました。みなさん有難うございました。

平成23年11月24日

平成23年度ボランティア・レンジャー育成研修会  
(受講者の思い)

研修部 菅美紀子

今年度も北海道立野幌森林公園自然ふれあい交流館主催、北海道ボランティア・レンジャー協議会共催で10月21日(金)22日(土)23日(日)の日程で育成研修会が開催されました。研修の内容についてはアンケートでの報告もあるので、今回は講師の島田明英さんが「自然ガイドで何を伝えるか」で受講者の方々が、ひと言ずつ思いを話したのが印象に残ったのでご紹介します。

自然への思いを伝えたい。自然が好きだ。緑を増やしたい。生活を見直したい。障害者への自然観察を考えたい。環境教育・植樹・雪の遊びをもっと伝えたい。森をもっと知りたい。虫に出会いたい。自然で体が健康になった。無造作な都市開発が気になる。自然は克服するものでなく共生するもの。自然教育に活かしたい。間伐がなされていないのが気になる(冬山で木が倒れている)ので。自然に親しんで学びたい。山オバサンを増やして社会参加。田舎で生まれたので自然の中にいたい。石が好きだ、どうしてここに? 植物などを究めてみたい。不自然なことが多いので自然を学びたい。山や海の観察をしたい。まだ伝えたいことが見つからないがこれから勉強したい。サラリーマンと別世界、自然とはどういうものか。関西から江別に、動物との出会いがあり勉強したい。今の暮らしでは自然に触れないので経験したい。自然を守りたい。山が好き、ここで楽しい経験を。虫が好き、植物が好きだ。子ども達に自然のことを伝えたい。森林浴は気持ちがよいのでそのよさを伝えたい。

受講者28人が当日話した事をそのまま載せてみました。聞き違いがあったらごめんなさい。定年になったからとか、暇だからなど照れて言う人もいましたが思いは伝わってきました。

その後のグループワークもケンケンガクガク。発表も雨にも負けず、助け合いもあり、ユーモアもあるとてもすばらしいものでした。





## 北海道ボランティア・レンジャー育成研修会に参加して

(平成23年10月21日(金)～23日(日))

美唄市 嵯峨和樹

### ○ヨーイ (ready)

私は、虫が苦手です。草や花、樹木の名前もまったく分かりません。でも、都会の喧騒から逃れ、静かに自然の中に身を置くことが大好きです。そして、いつも人との関わりを遠ざけてきた、そんな性格の持ち主が、どういうきっかけか、自分を見つめ自分探しに放浪する中、自分を癒してくれる自然という言葉の響きに導かれ、自然ガイドの領域に足を踏み入れていました。

### ○ドン (start)

北海道ボランティア・レンジャー育成研修会講義「自然ガイドで何を伝えるか」のはじめりに問いかけがあり、「自然への思いは?」「伝えたいことは?」「好きなことは?」について、全員にスピーチが求められ、私も「思いは美しい自然、その美しい自然を守る」との答えに対し、「美しいにはいろいろな意味がありますね」と講評を頂き、心意を汲み取っていただけましたが、後でもうひとつ「美しい心で」を付け加え、「美しい心で、美しい自然を守る」としたかったのが、ちょっと後悔でした。

### ○プロローグ1 (prologue1)

3日間の日程は、老体鞭打つ年齢の身にとっては、少し過酷な面もありましたが、好きなことをすることと、多少のストレスは老化防止になるとの励みから、何とか最終日を迎え、知事名の受講証書とボランティア・レンジャー(自然解説員)のプラスチックのネームプレートを誇らしげに戴いた瞬間は、疲れも吹っ飛び、喜びは絶頂に達し、満足感、充実感を味わえたのは、私一人ではないと思います。これからのしかかる重圧を知らずにとの懸念は、知らぬが仏というように、忘れてですが。

### ○プロローグ 2 (prologue2)

ただ、いつも頭にモヤがかかる言葉にボランティアがあります。ボランティアは、志し、思いがあれば、行動によりその目的は達せられ、結果、納得し満たされる熟練の域に達するまで、かなりの時間がかかるのではないかと、不安と迷い、邪心もありました。

### ○プロローグ 3 (prologue3)

しかし、そんなモヤモヤも、皆さんと知り合い仲間が出来たことが、私にその迷いを払拭させ、自然解説員のプロを目指す決意に、強く背中を押して戴くこととなり、感謝申し上げます。

### ○エピローグ (epilogue)

ベテラン解説員の皆さんは、それぞれ個性を持たれ、広く浅く、また、とことん深くと、その道のエキスパートとして、コミュニケーションにも長けていらっしゃると思います。人との付き合いが苦手何てってこととは言っていないと思います。私もそんなプロを目指し、皆さんのお側に付かせて頂き実践を学び、いつかお役に立てる日を夢見ております。みなさま本当にありがとうございました。



## 北海道ボランティア・レンジャー育成研修会に参加して

(平成23年10月21日(金)～23日(日))

実習「プログラム作成」発表「フィールド発表」D班について

美唄市 嵯峨和樹

我がD班グループ6名は、落葉の季節、無造作に踏みつけられた葉っぱに目を向け、タイトルを「葉っぱのいのち」、ねらいは、植物の循環と再生の重要性、命の大切さを伝えることを主旨に、キーワードを「葉っぱのフレディ」として、業務分担を決め模擬観察会に臨みました。

進行役によるルールの説明と注意事項が述べられた後、笛が吹かれ、対象とされた小学生全員22名に、一人1枚ずつ好きな葉っぱを30秒以内で拾ってきてもらい、次の30秒以内で新聞紙の上に同じものを揃えてもらうゲームを企画しました。

時間厳守の中、整然と並べられた中から、あらかじめ決めおいた3種類の葉「ハウチカエデ」「ホオノキ」「ハリギリ」について、それぞれ担当する3人は入念な準備をし、わずか2分間の説明に、その葉に注がれた熱い思いが述べられ、説明を聞く仮想小学生にも、解説する側の仲間にも、強く伝わりました。そして、まとめとして枯葉となった経緯について、分かりやすく説明をした後、終わりに「葉っぱのフレディ」って知っていますかを、問いかけ、落葉を拾い、葉っぱを通して命の循環、命の再生、命の大切さを伝えたかったこと、学んで欲しいことを、述べましたが、ちょっとダイレクトにまじめ過ぎたのかな？の感は否めなく、続けて、東京聖路加病院の100歳にもなる日野原先生が、ニューヨークで「葉っぱのフレディ」をミュージカル公演までされている紹介に加え、知らなかった人にも「主役は葉っぱのフレディ、春に生まれた新緑の若葉は元気に日光浴。夏は成長して木陰をつくり、秋には紅葉して人々の目も楽しませる。冬は落葉し大地に還ると、また春が巡ってくる」と説明すれば良かったかなの反省が…。

追伸《蛇足》

もう少し、くだけて、22名プラス2名の24名が、2枚ずつ、葉っぱを拾い集める設定をし、草原（くさはら）に48枚の葉っぱを並べ、問いかけます、ここはどこでしょう？と、秋に、秋の葉っぱが、原っぱに並ぶ、ここは秋葉原です。会いたかった、会いたかった、会いたかった、イエイと叫び、子ども達を惹きつけ、そして、落葉を48枚拾った君達はAKB48ですよ。と引き込むアイデアはどうでしょう。

**\*\* 佐野亮二さん**（オホーツク支部 副支部長）  
<北海道産業貢献賞（林業関係功労賞）> を受賞 !!

おめでとうございます。私たちの会としてもとっても嬉しく、励みとなります。遠軽地方の林業振興に貢献され、その功績が顕著であったと評価されての受賞となりました。

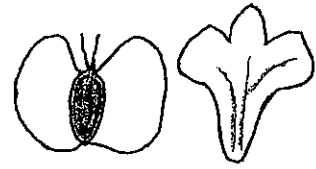
佐野さんは、昨年は「林野庁長官賞」という大きな賞をいただき、今年是这样した素晴らしい賞を受けました。



## 美々川源流を訪ねて

苫小牧市 谷口勇五郎

11月中頃、某会の観察会で美々川の源流部2ヶ所を訪ねました。国道36号を、千歳を目指し、科学技術大学辺りで、右折れ、JRのガードをくぐり、2km程進みました。更に右折れ、大きな養鶏場の右を通り、まもなくバスを降り、徒歩で平坦な広葉樹林の小道を20分ぐらい歩きました。30mぐらいの崖を降りると、駒里の美々川源流でした。



シラカンバ  
果実(左)と果鱗(右)  
(実物の5倍)

蛇口2つ程の水量のある湧水は5~6ヶ所もあり、水溜りのような緩やかな流れがありました。オランダガラシ(クレソン)・エゾノカワジシャ・オオバセンキュウなどが生えており、茎が20cmぐらいでさじ形の小さい葉を付けた水草(ミズハコベかな)もありました。陸に上がって観察していると、誰かが、赤い実をつけた1房を持って来ました。生えていた木にぞろぞろついて行きました。川岸に低木が斜めに伸びており、ワタゲカマツカに落ち着きました。帰りの崖を登りながら対岸の遠くに樹冠が赤く見えるのはアズキナシの実と思いました。帰宅後、赤い実を調べると、ナナカマドは球形に近く、径7~8mmで黒点は少しある。ワタゲカマツカは径1cmの楕円形で果柄には皮目が多い。アズキナシの果実は俵形で径8mm、皮目や黒点が散在していました。

今度は少し引き返し、大学の近くを通り、千歳湖に行きました。湖畔の小道には全く人影がなく、広葉樹の林床にはミヤコザサが生えていました。その辺りで昼食。そこにはミズナラ・シラカンバ・ドロノキが生えていました。シラカンバの果実が手に届きそうなところに付いている木があったので、2個もらいました。1つは皆に見せながらばらばらと果実が離れるのを見てもらいました。シラカンバ・ダケカンバ・ウダイカンバの果実は1本の糸状のものに直接附着しているものと思っていました。帰って調べると、いずれも、ハンノキやケヤマハンノキと同様、球果(マツボックリ)のつくりと同じように、種鱗(カバノキ科では果鱗)の間にはさまれて種子(カバノキ科では果実)があるのでした。シラカンバでは果穂(果実と果鱗の集合体)が熟すとばらけやすくなっていたのです。シラカンバでは1個、ウダイカンバには2~4個の果穂が下向きにぶら下がり、ダケカンバのものは1個ずつ上向きになっています。シラカンバの果穂は果柄1.5cm、長さ3~4cm、径1cm程でした。

もう1つの美々川の源流部は千歳湖の上流1kmほどで大学そばの道路下にありました。ところどころにヤチボウズがあり、春先にはカエルやサンショウウオの卵がありそうな感じのところでした。

夏シーズンが終了しましたので、小樽支部の行事概要を報告致します。

① オタモイ、赤岩 参加者31人

春一番、恒例の行事で小樽市総合博物館と共同で実施、

この山は、町に近い割に、ありのままの自然が沢山残っている。カタクリ、エゾエンゴサク等の春植物、常緑低木のハイイヌツゲ、エゾユズリハの外、ツルシキミの深紅の果実も時々見つかる。博物館山本学芸員から、シナノキについての蛾の幼虫の横並び食痕の話、当会成田先輩からは、赤岩山の成り立ちの話外、貴重な解説を頂いた。

② 軍事道路 参加者38人

斜面上方で採石工事の発破作業が行われているので、予め現場事務所で確認をすること。又、地元の林東洋氏から山道の管理についての苦労話など聞くことができた。

帰りは、石倉山裏側の送電線下巡視路を歩く。足場は悪いが直線コースなので、見通しが良く小樽の街が手に取るように見えた。途中、カンボクの赤い実が見ごろで、ワラビもあった。市街地に出る手前あたりの小沢に巨大な堰堤が二基あって、びっくりした。

③ ニセイカウシュッペ山 参加者13人 (自家用車相乗り)

年に一度の本式登山で、当会々員一鉄蔵さんに下見外事前の準備、当日のリーダーまでお願いした。古川林道終点(標高1100m)まで車で入れるので、以前からみると大変楽になった。花と、残雪と、岩山をみながら歩くのは疲れを忘れさせてくれる。特にチシマノキンバイソウが道端に沢山あって、辺りを明るくしているようだった。林道が使えぬ登山では、自家用車の世話になるので、事前の打ち合わせが肝心である。

④ 銭函天狗山 参加者18人

小さい山だが、ピリッと引き締まった山である、と案内書にあった。「天狗」の名の付いた山は、小樽に三つある(小樽天狗山、朝里天狗山、銭函天狗山)地元から見て尖って見える山は、これを天狗の鼻に見立て、皆天狗山となったという。山頂下の台地で北嶋徹氏による柱状節理や板状節理の、又、手稲山より銭天の方が年代は古く見貴分といえる等の説明があった。登山口のすぐ先にある高床式の山小屋が、40年前と同じ姿で建っているのが、不思議に思える。その辺りにはミズナラやイタヤに混じってアオダモの小径木が生育している良い林相である。

⑤ 名所巡り 参加者26人

名所の目安は、(1)聞いたことはあるが行った事はない、(2)思いがけないものが有りそう、(3)なるべく舗装道路は歩かない、の三つに留意する。

前年思いつくまま行った所、以外に好評だったので、本年は次のように実施した。

(イ) 五百羅漢、予め正法寺住職に30分程の説明を依頼、

(ロ) 旧潮見台浄水場(現在使用していない)、施設の建物が洋風で特異、

(ハ) 小林多喜二墓、大勢での墓参り、女性らがアズキナシの赤い実の付いた枝を供える

(ニ) 和光荘、北の蒼酒造洋風建築物、管理人の許可をとって庭園のみ鑑賞、紅葉が見事。

⑥ 小樽天狗山、納会、(参加者20人)

既に顔見知りの方も多一中、北海道ボラレン協議会に入会された4名(工藤正司、北嶋徹、石田俊一、前原敏行の各氏)を改めて紹介、参加者との初顔合わせを行う、小樽天狗山辺りは、工藤正司氏のホームグラウンド、おたる自然の村の行事や、林道の新設の頃の裏話、など聞きながら、舞い落ちるカラマツの黄葉を浴び、落葉を踏み分けて古い登山道を登る。湿地帯に季節外れのフキノトウが頭を覗かせている。山頂レストランで昼食をとり、一年を振り返って、一人ずつ体験談などを述べてもらって納会を無事終了した。

## 東日本大震災 その後の相馬市の現況について

菅美紀子

早いもので、東日本大震災から10ヶ月も経ちました。

昨年5月1日に相馬に行った時は仙台空港が使えず福島空港からでした。相馬市は宮城県境にあり、仙台空港からは50キロ位で便利でしたが福島空港からはレンタカーで3時間もかかりました。

道々、ブルーシートに覆われた瓦屋根が多く目に付き、福島から相馬に向かう115号線ではすれ違う車のほとんどが自衛隊の支援車両でした。数十台もあったのでしょうか。相馬に近づくとつれ、妙に胸がドキドキしたことが思い出されます。母の住む家も話では聞いていましたが、瓦屋根はブルーシートに覆われていました。(その後も放射能の問題があり改修はなかなか進みませんでした。)

翌日、被災地に行きましたがあまりの変わりように心が硬直したような気持ちになりました。ガレキの間をぬうように車を走らせ、道は片付けられていたので松川浦、尾浜、原釜を見て回りました。海水浴をした浜、潮干狩りをした浦、風光明媚だった松原や砂州や中洲は、こなごなのガレキや船、木、流された家屋等で埋め尽くされいったいどうしたらいいのと途方にくれる惨状でした。

市役所には従姉と行き市長に直接義援金(相馬市災害孤児支援金)を渡すことができました。市長の話から、なんとかこの大災害から立ち直りたいという気持ちがひしひしと伝わってきました。

その後、東日本大震災の記録・第1回中間報告(平成23年7月31日現在)が相馬市災害対策本部から送られてきました。復興には長い時間がかかることが解ります。

11月2日に、今度は仙台空港からレンタカーで相馬に向かいました。空港はきれいに元どおり(見た目は)でした。しかし空港と海の境界にあったみごとな松林は、変色した松が数本立っているという悲しい姿になっていました。空港周辺にあったガソリンスタンド、レストランは見当たりませんでした。レンタカー会社もまだ再開できてないところもあるようで借りたのはいつもの会社からではありませんでした。空港から国道4号線までの道はきれいになり、空港周辺の会社や工場も再開できているようには見えませんでした。

ただ良く見るとガレキの山がたくさんありました。とても整然と積んであるので最初は気付かないくらいでした。国道4号線から岩沼市で国道6号線に入り阿武隈川を渡って、亘理町、山元町と南下して福島県の新地町に入ります。途中の山元町には国道6号線を、津波が越えたことが見てとれるところがあり、住めなくなった家もありました。

母は年の割には元気で、翌日母が案内するというので海に向かいました。あれほどあったガレキはすっかり無くなっていましたが、一部大きな船はまだ残っていました。海沿いの家は解体中や改修中という地区もありましたが、全くの更地の地区もありました。松川浦沿いに軒を並べていた商店はがらんとして寂しいかぎりです。

松川浦は砂州（全長8キロもあり外海と浦を隔てていました）が300メートルに渡って決壊し、まだ改修工事が終了せず外海状態でした。水田にあった大小様々なごみも、母の話ではボランティアの方々が横一列に並ぶローラー作戦で片付けて下さったそうです（広さを思うと頭が下がります）。それでも塩害、放射能の問題もあり、稲作はもう無理のような話を聞きました。

相馬市は昨年6月に仮設住宅1500戸が完成し市内の被災者はすべて移りました。7月には復興企画もまとまりました。いずれの事業も被災地主体の復興をめざし、官、民、業、学が一帯となって取り組むとなっています。また相馬市では今回の震災で、遺児、孤児となった子どもは51人。相馬市震災孤児義援金は3億円寄せられ、毎月3万円を支給できることになったそうです。

思うに相馬は漁業、農業が基幹産業でした。漁業組合はこの1月の漁業再開をめざしていましたが延期になったそうです。食物の放射能値の安全基準が500ベクレルから1000ベクレルになることが決まったからです。水揚げの50パーセント以上が基準を越えてしまい、再開は未定になったそうです。先日テレビで、相馬のハウスいちご狩りの様子が流れていました。保育園児がにこにこ顔でほおぼっていました。母の周りでは子どものいる家では地元産の野菜を食べないそうで、母の菜園の野菜も子どものいる家は遠慮するそうですから。これからどうなるのか見守りたいです。市ではほとんどの野菜の放射値を地区ごと公表（私も見てみましたがほとんど0、出ても微量でした）しているのですが、スポットでどこかで出たというニュースが時折流れるのでまだまだ安心、安全になるには時間がかかりそうです。風評被害はほんとに手ごわいです。スーパーにも福島産の野菜をしばらく見ません。特別な催しの時位です。残念なことです。

昨年12月に原発を考える映画「ミツバチの羽音と地球の回転」を観ました。これは山口県上関町田の浦が原発建設予定地になり、それに反対する対岸の祝島の人々の姿と、スウェーデンが脱原発を決め、着実にエネルギーを自然エネルギーへとシフトし、持続可能な社会づくりが進んでいるというものでした。すべてが日本の場合に結びつくとは思いませんが共感するものがありました。環境裁判所というものがあるというのも驚きました。おおまかに言うと大切な地域やすばらしい自然環境については、そこに住む人や地権者だけでなく国全体で開発などを考えて決めるというものでした。原発事故が起きて立地している所だけの問題ではないと強く思わされました。

市長はめざすのは人間の復興だと言っています。各方面からの支援を仰ぎ復興計画を、今年には目に見える形にしていきたいと、新年の講演で話していました。

昨年末にうれしいニュースもありました。JR常磐線の相馬・原町（南相馬市）20キロ間が再開したことです。これからも見守り続け、応援していきたいと思っています。なにより少しでも早く美しい海と山河を取り戻し、漁業ができ、農業が安心してできる相馬市になってほしいです。



# レクリエーション

エドワード・グレイ 著  
清水 利章 訳

私がこれからお話しすることは、人生における楽しみをなにかこれから見つけようとなさっているみなさん方に対しまして、ごくたまにお話していることでもあります。人生における楽しみをなにか見つけようとなさっている、そのような時期にはもうすでにいらっしやらない方にとりまして、なにかあてはまることはあるかと思っておりますけれど、人生における楽しみをある時期にすでに見つけられた方にとりましては、このお話がお役に立つものかどうか、ははなはだ疑わしいところでございます。

われわれは、先祖をのり越えるさまざまな手段におきまして、きわめて有利な立場にあると思えます。と申しますのは、総じて、きわめて少ない貧困と、より多くの富に恵まれているからであります。楽しむための、より多くの機会があると考えられるからであります。現在、楽しむための方法として考えられますもので、先祖が手にすることができなかつたものといえますと、映画や車、さらにほかの多くのものがございましょう。とは申しましても、さらに多くの内容に溢れております新聞から、私が判断をくだすのは困難かと思われまふ。われわれは、実に、変わったものへの欲求をかかえこんだ時代に生活しているように思われまふ。このような傾向は、むしろしだいに強まってきているのではないのでしょうか。それを、ごく一般的な不満の種として持つようになったのですから。もしも人びとを幸福にするものがそこにあり、自分自らに幸福をもたらすものもそこにあると考えられるならば、それは実に価値あるものと言えるであります。私がレクリエーションについてこれからお話ししたいと思っておりますことは、実に、このような見地からなのであります。

レクリエーションが幸福に寄与する唯一のものであるということは、まず言わずにおきましょう。きわめて大切なものといいたしましておすすめてしますレクリエーションが、実は、唯一のものではないからであります。幸福になるために欠かすべからざる要素は、少なくとも四つあると私は考えまふ。第一は、われわれの行動を導く、ある道徳的な基準であります。第二は、家族や友人とよく心のかよいあうような、すばらしく円満な家庭生活であります。第三は、自国に対して自らの存在を正当化するような、あるいはよき市民たりうるようなある種の仕事を持つことでもあります。第四の事柄とい

たしましては、ある程度のひまな時間を持つことであります。しかも、自らに幸福をもたらすために、ある方法によりまして、そのひまな時間を活用することができる、ということでもあります。とは申しましても、このひまな時間をうまく活用することに成功したといたしましても、このひまな時間をうまく活用することに成功したといたしましても、いま申しあげました他の三つのいずれかにおける失敗を贖<sup>あがな</sup>うものではないのであります。しかしながら、ほどよい内容のひまな時間と、そのひまな時間をうまく活用することは、幸福な人生のために欠くべからざるものである、と私は考えます。ひまな時間を幸福のために活用した結果としてもたらされるものは、いかなるものでありましようか？ 余暇をどのように過ごしてよいのかわかりませんという方に、ときおり私はお目にかかります。そのような方は、このように仰言います。「自分の望んでいるものを、だれもがわかっているわけじゃないと思うわ。それがわかるまでは、だれも幸福になんかなれっこないのよ」前の言葉からは、その結果といたしまして、ご自分のお望みのものを明確に知るという部門<sup>カテゴリー</sup>から、自分自らが引き出さなければならないと言えますね。後ろの言葉からは、それをわかりさえすれば、だれもが幸福になれるようなあるものが、必ずや存在するということになりますね。これがレクリエーションのきっかけなのであります。みなさん方は、私にこのように仰言る権利がございます。「総括的なご意見といたしましてはまことに結構なのですけれども、あなたがだどり、あなたご自身が実際にご活用なさったレクリエーションとはどのようなものなのかを、まだお話になつてはいませんね」と。しかも、その質問にお答えすることを避けることは、私にとりましてもアンフェアでございますね。ある事柄につきまして、私は落第生であることを認めないわけにまいりません。私はゴルフにつきましては、まったくの落第生なのであります。結果を出すことができなかつたからではありません。結果を出したいと思えなかつたからなのであります。私はゴルフを大いに尊重しております。大方の人びとにとりましては、ゴルフが大そう好評であることは確かでございます。ゴルフをなさっておりますきわめて多くの立派な方がたを、私は存じております。ところがあいにく、ゴルフは私に楽しい時間を与えてはくれませんでした。それゆえに、大いなる賞賛とともにゴルフを評する方がたに対しまして、ゴルフに関する推奨の言葉を述べることを、私はさしひかえたいと思うのであります。

とは申しましても、いくつかの競技、レクリエーションの一部としての競技を、私は推奨いたします。試合を見たいと思ひ、しかも十分にひまな時間がありさえすれば、大そう古い競技で、技だけではなく活発な動きを要するリアルテニス、あるいはコートテニス（16～17世紀に行われた屋内テニス的一种）の競技を、私は大いに

楽しめます。アメリカの方がたも、あるいは興味をお持ちになるか  
もしれませんね。そもそも初めてなざる競技でありますから、なに  
がしかのプライドをおかけになって。そのような一面のある、競技  
なのであります。いずれにいたしましても、その競技の近年の歴史  
におきまして、一人のアマチュア選手が世界チャンピオンとなりま  
したけれど、そのアマチュア選手こそはアメリカ人なのです。あま  
りにも注目を集めすぎましたその競技につきまして、イギリス人は  
ときに痛烈な酷評を加えたものであります。アフリカで戦争が勃発  
いたしまして、その戦争に加わりました私のよく知るイギリスの将  
校と、アフリカで偶然にお会いしました。大ブリテンが攻略しまし  
たドイツの駐屯地の一つで、ドイツによって作成された一枚の地図  
が見つかったそうであります。それは、戦争の終結時にそうなるこ  
とを目論んで作成された、誇張されたアフリカが載った地図であり  
ました。アフリカの一部の地域をことさらきわだたせ、すでにドイ  
ツになっているものでした。大ブリテンのために、そこにはなにも  
残されてはいなかったのですけれど、「イギリス人のためのサッカー  
一場」としてのされた、サハラ砂漠のど真ん中の小さな一区画だけ  
あったということでもあります。サッカーは、イギリスと同様にアメ  
リカにおきましても国民的な競技ですよ。とは申しましても、き  
わめて激しい戦争のさなかにおきまして、みなさん方か、あるいは  
わが邦の兵士が、サッカーがいくら好きとは申しましても、それを  
するということはちょっと考えにくいことではありますね。レクリ  
エーションの魅力的な一部といたしまして、私は確かに競技を加え  
ました。さらに、みなさん方が見いだしました一つか二つの競技に  
つきまして、ぜひ述べさせていただきたいと存じます。若者のため  
に、技術のみではなく、健全なる肉体の活動と体力の維持をもたら  
し、風雪に耐えて存在する競技をであります。

つぎに私はスポーツについて述べてみようと思えます。私の好き  
なスポーツは、一つや二つにとどまるものではございません。とり  
わけ鮭や鱒釣りが、ほんとうに好きでたまらないのであります。こ  
とによりますと、つぎに申し述べますことから、ささやかな信頼が  
もたらされるかもしれません。大いなる情熱を注いでまいりました  
、いくつかの思いについてお話したいと存じます。大ブリテン島  
におきましては、鮭や鱒釣りにもっとも適した時期は9月で終わら  
ります。鮭釣りにもっとも適した時期がふたたび始まりますのは、翌  
年の3月であります。私の考えでは、最良の鮭は3月と4月に釣れ  
ます。10月ともなりますと、来年の3月に始めます鮭釣りを楽し  
みにして待っている自分がいることに気づくというのが常でござい  
ます。そして、鮭釣りに思いをはせながら余暇を過ごし始めるので  
あります。ベッドに目をさましたまま横たわり、どれほど早くとも

来年の3月まではすることのできない釣りのことを考え、空想の流れの淵で釣りをするのです。その釣りを純然たる楽しみとして待っている間に、つい、実際の釣りには少しも役にたたない、きわめて多くの時間を費やしてしまったことに思っていたのであります。それゆえに、1月が始まるまでは、なにがなんでも空想の流れの淵では釣りをしない、と私は規則を定めたのであります。そうすることによりまして、あらかじめ時間をさいて、1月からの2か月間だけはそれに多くの時間を費やすことを許したのであります。私が楽しむ鮭釣りは、船釣りではございません。川岸に沿って歩くか、流れの深みを歩いて渡るのであります。楽しく、しかも持続的な全身運動となります。そのうえ、胸をわくわくさせるスポーツなのです。ところが、私の多くの友人たちは釣りを嫌っています。かれらに對しまして、私は言うのであります。ジョージ・メレディス (George Meredith; 英国の詩人・小説家、1828~1909) は、ご自分の本をちっとも読まない方たちに対しまして、「なぜ読まないのかね？」と不満をもらされましたけれど、ジョージ・メレディスが仰言った言葉と同じものを、私はいつも釣りに見いだすのですよ、と。みなさん方がたとえ釣りをなさらなくとも、私が感じているのと同じような幸福の状態にみなさん方がいらっしゃるならば、私が釣りが好きなように、みなさん方がお好きものは、みなさん方にとりまして、宝物であろうと私は思います。

レクリエーションに関しましては、まだほかにもたくさんテーマがございます。そのすべてのテーマにつきまして、たとえちよっぴりでありましても触れることは、かなわないことでもありますけれど、そればかりではございませんでして、そのテーマの一つだけでありましても、十二分に論ずることはひどく難しいことのように、私には思われるのであります。とは申しましても、みなさん方がお好きならば、レクリエーションにおきまして特に大切なものでありますガーデニングの楽しみにつきまして、ちよっと触れなくてはなりませんまい。ベーコン (Francis Bacon; 英国の随筆家、哲学者、政治家、1561~1626) はこのように申しております。「全能の神は始めに庭に種をお蒔きになりました。実にそれが人間の楽しみにおける最も純なるものとなったのであります」と。それが、生産物をふやし、しかも収穫報酬に関するものではない、自然の理法の結果としてもたらされる楽しみの一つなのでございます。さらにみなさん方がガーデニングを発展させ、さらにガーデニングについて精通し、さらにガーデニングに心が奪われますよう、心よりお願い申しあげるしだいでございます。ガーデニングは、それをおもしろがる好奇心のおもむくところにおきましては、とびきりよい季節というものは、ほとんどないも同然なのであります。ガーデニングを楽し

むために、どれほど年をとったといたしましても、視力がなお残るかぎりには、どのような年齢であっても、おかまいなしなのでございます。

私はここまで、競技、スポーツ、そしてガーデニングについてのお話をしてまいりました。この三つのいずれをも心ゆくまで楽しめる暇も機会も、おそらくどなたもお持ちになってはいないのではないのでしょうか。ごく少数の選ばれた人のみが、この三つのいずれをも好む熱情的な気質を、十分な範囲にまでわたって持ちあわせている、とすることができののかも知れません。とは申しましても、ほとんどの方がたは——私はみなさん方を、ほとんどの方がたとしてお話しているわけではありますが——その三つのうちの少なくとも一つにつきましては、どなたでもその機会を見いださないのであるのでしょうか。みなさん方の幸福に十分に寄与する、価値のある三つのうちのいずれかにです。ここで、さらにより大切な主題へと、私は話をすすめたいと存じます。

読書は、レクリエーションといたしまして、もっとも大切に、しかも、大いなる満足をもたらすものであります。私は、楽しみのために、書物を活用しようと思っております。書物がなければ、楽しむための読書力を身につけるのは困難でありましょうし、われわれにとりまして、まったく関係のないものなどおそらくは存在しないでありましょう。ともあれ、読書を通しまして、われわれは、孤独の淵へと沈まざるゆるぎのないとりでを構築することになります。このようなとりでを持つことがなければ、われわれは退屈からまぬかれんがために、家族や友人、あるいは来客のお情けにさえすがらざるをえない、ということになりますのであります。ところが、読書に楽しみを見いだしますと、たとえどれほど長い冬であろうとも、夜ごと、尽きざる楽しみの機会を与えられることになるのであります。

詩は、きわめてすばらしい文学であります。詩によってもたらされる喜びは、詩を作る喜びとともに、きわめて大切なものであります。とは申しましても、詩をものにするということは、並大抵のことではございませんまい。いまだ、詩をものにしないたくさんの方がいらっしやいます。先日私は、詩がほんとうにお好きではないさるご婦人とお会いしました。詩は、彼女にいかなる喜びも、満足ももたらさしはしないそうであります。しかも、彼女が仰言るように、散文によって表現することが許されますならば、その詩よりもはるかにすばらしい想像力をお目にかけることができましてよ。詩とは、その程度のものじゃございませんかしら、とそう申すのでございます。同様に、音楽がまるで好きではない方もいらっしやいます。私は二曲しか知りませんと仰言る、さるイギリス人を私は存じ

ております。一曲は国歌でした。「God Save the King (国王陛下万歳)」、そしてもう一曲は、題名を思い出すことすらできかねるのでありました。詩や音楽をお好きではない方というのは、救いたいのかも知れませんか。とは申しまして、詩に関しましては、私自身の経験から、一二のご提案を申し述べたいと存じます。ほとんどの方が関心を持たないようなたくさんの詩がございます。そうではありまして、若い時分にちょっぴりでも苦勞をなされまして、興味のわく一人か二人の詩人を見つけられますことが肝心なのであります。そのような詩人と幸運にもめぐり会うことができましたならば、みなさん方ご自身にとりまして、それはそれは大そう大きな意味を持つことになろうかと思ふしだいであります。すなわちそれは、みなさん方ご自身にとりまして、大切な宝物となるからであります。詩は高度な知識のみにて、われわれと親密な関係を築くことができるわけではございません。それは、鋭敏な感受性によつてもたらされるものなのであります。ほとんど、皮膚の毛穴から入り込むということが出来るかも知れませんが、年をとって、われわれの皮膚が乾燥するように、鋭敏な感受性も鈍麻するものなのであります。それゆえに、われわれはしだいに知力のみによって理解するようになるのであります。自分のために特別に心をくわいて書いたのではありますまいかとさえ思われますような、すばらしい詩人、あるいは詩人たちと、35歳に達する前の若いときにめぐり会わなければならぬのであります。自分自らの個人的な経験を通して、ありありとお感じになった、その詩のなかで語られる言葉を見つけられますまでは、気づくことのなかつた心の裡なる私に、そつと秘密をもらした、まぎれもないその方と思われる、そのような詩人を見いだしえたならば、それに見あつた幸福がわれわれに訪れるのは必定なのであります。それは大そう価値あるものを手に入れたことになるのであります。われわれが若き日に出会つたそのような詩人は、年とともに消え去るものではございません。われわれの裡なる心にとどまり、われわれ自身の人生における心の友の一人となるのであります。しかもそれは、精神的な力と慰めと大いなる喜びとの確実な源泉となるのであります。

私がさしあたり触れなければならぬ、文学におけるいま一つ分野がございます。それは哲学であります。私はここで、お二方ともに公生活におきまして大そうきわだつた存在であります、私が存じあげております方を引きあいになさなくてはなりません。お二方ともに、哲学を読みかつ書くことを通しまして、余暇の過ごし方と真のレクリエーションとを見いだしている方なのであります。お二方ともにご存命でありまして、実は、名前を公表する許可を私はいただいてはおりません。とは申しまして、私は決してねたみに墮

しているわけではないのであります。ただただ感嘆の念をもちまして、お二人のレクリエーションのことについてちよつと触れることが、私の大いなる敬意の表れそのもとお考えになられまして、そこになんの間違ひもないのであります。哲理を用いることなく見いだしうる哲学に、おそらくあらゆる方が大いに精通している、と、あるオックスフォード大学教授が論じたと言われております。私はそのことを全く否定するつもりはございません。オックスフォード大学の学生のとくに、私はプラトンを読みました。と言うよりも、読まされたと申しあげたほうがよいかも知れませんが、オックスフォード大学を卒業後に、私の思っているような方かどうかを確かめるために、いま一度、私はプラトンを読みました。ほかの哲学者からはついぞ味わうことのできない喜びによりまして、私はプラトンが大好きになりました。私が軽口をたたいていると、みなさん方が悪くおとりになりませんよう、切にお願い申しあげます。私はしごくまじめにお話をしているのでございます——レクリエーションにつきましてね。そして私は、二人の友人に対しまして敬意を表することによりまして、哲学についてちよつと触れるべきであると感じたのであります。とは申しましても、レクリエーションの大切な眼目にありますように、それをなすにあたりましては、私はいかなる緊張状態にもなかつたのであります。

ここで、読書による文学的なレクリエーションにおきまして、きわめて大切なよりどころにさしかかつたのであります。次世代から次世代へと、いかなる時代におきましても読みつがれております大著こそが、間違ひなくわれわれの読むべき書物であると認識されるがゆえに、美点たるしるしが付与されてきたのであります。いかに広く、さまざまな選択があると申しましても、きわめて信頼でき、大いにレクリエーションの要を満たす書物は、多くの古い書籍のあいだから見いだすことができるのであります。ある方が、このように仰言っております。「新しい書物が出版されますいかなる時代におきましても、古い書物を読むべきなのであります」と。これをあまりにも字義どおりにお取りにならないでいただきたいとは思いますが、古い、本物であることが明らかにされた書物にこそ、優先権は与えられるべきではありません。この、ある方というのは、イサク・ディズレーリ (Isaac Disraeli; 英国の保守党政治家・小説家：首相(1868, 1874~80); ニックネームはDizzy, 1804~81) と記憶しております。自分が最善を尽くした想像力というものが、あるとき陳腐な作品群のなかにあることを認め、屈辱を感じ、創作しえなかつた、とかれは述べております。ともあれ、変わらざる大いなる楽しみのみならず、あらゆる人の考えを基準とした一つの規格品をわれわれに与えうる書物は、時の試練に耐えぬいた大著

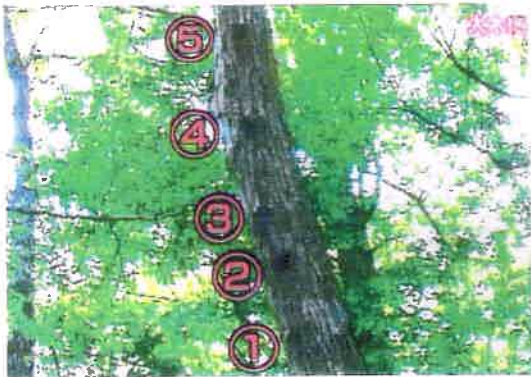


天然記念物に指定されている大型のキツツキ、留鳥である「クマゲラ」はこの野幌の森にも生息しています。暖かい季節、鳴き声は聞こえますが、稀にしかその姿を確認することが出来ません。しかし、冬を迎え降雪と共に林内も見通しが良くなりますと、遊歩道からも時折、姿を見かけることが出来るようになります。

◎「大きさ、色彩」 大きさはカラス大で、色は黒く、メスは後頭の一部が赤く、オスの頭上は全体に赤い。



◎「ねぐら」 「ねぐら」はオス、メス別々に数本持っている。営巣木から600m以内くらいに、生木、枯れ木を問わず木の内部が腐り、すでに空洞化している木に、一定の方向に向け入り口を数か所あけてあり、内部を自由に移動できる。他の動物が侵入してきた場合に備えていると考えられています。



◎「営巣木」 樹形は様々ですが、共通しているのは一定の高さまで下枝がなく、少し傾いて、木肌がすべすべしているか、枯れ木でも樹皮がはがれてすべすべしている木が多い(木部は空洞化していない)巣穴は一か所だけ空ける。すべすべした木を選ぶのは他の動物の侵入を防ぐためらしい。





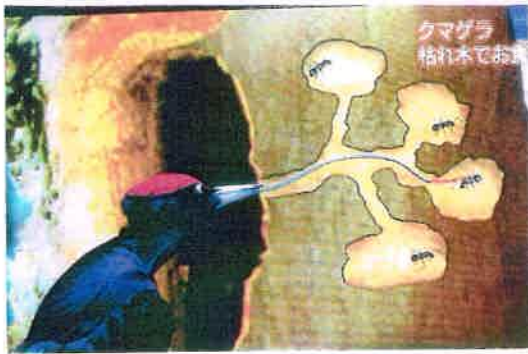
◎行動圏 営巣木から、おおむね1000m以内の区域で、尾根とか沢などの天然界が目安らしい。(餌探しからか、晩秋から冬季はもっと広いようだとのある)

◎採餌は 積雪前 林床の古株や倒木(この時期、ササや草で飛ぶ姿や声は確認出来るが、観察は難しい)

積雪後 これまで、採餌していた場所は雪の下になるため、枯れ木や生木で虫の付いている立木から採餌となる。幹に両足と尾羽で体を支え、穴を掘ったり、枯れ木の皮を剥ぎ潜んでいるアリやカミキリ虫の幼虫等の昆虫を食べる。一旦狙いをつけると、その木に集中的に訪れる。一週間前後も通い食べつくす。冬の森は見通しがよく、採餌中は目立つことから観察の機会が多い。

◎採餌の仕方 嘴は「ノミ」のような形で、縦長の穴を掘ったり樹皮と幹の間に隙間を作り、長い舌を使い、潜むアリやカミキリ虫の幼虫を食べる。(アリスイの採餌をテレビで見たが、舌は異様に長かった)

◎餌の種類 好物は「ムネアカオオアリ」の成虫と、その幼虫らしいが他の昆虫や植物の種子も食べる。アリは一つの巣に沢山いるので、子育てには好都合のようです。



\*樹皮と幹の間は、15cm四方くらいの部分を嘴を使って幹と隙間を作り、長い舌を差し込んで食べる。

食べ尽すとその部分をはぎ落とし、再び、次の部分を始める。(直径60cm高さ20M位の木を、5日位で丸裸にした)

◎鳴き声(聞きなしは難しいので本の表現とした)

◇波型に飛びながら「キロキロ キロキロ」 ◇木に止って「キョーン キョーン 何度も」  
仲間との連絡か ◇木の上で身を隠すように「クワッ クワッ」警戒せよと聞こえた

◎餌を持ってきた



◎糞を吐いて捨てる



クマゲラの巣 (この場合2本)

オス 170M~390M      メス 110M~605M

産卵期 13日~15日

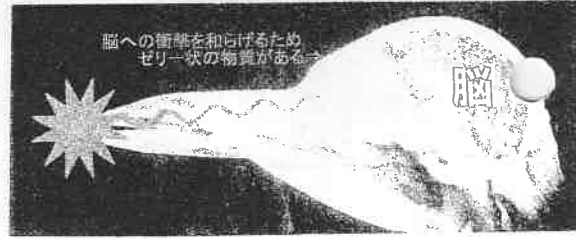
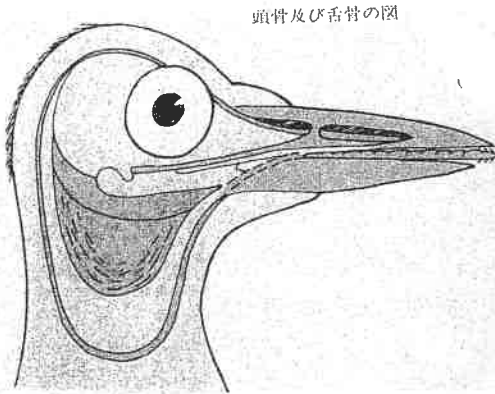
孵化期 28日~33日

巣立ちは6月20日前後

親離れは2か月位後の8月下旬位 これ以後は、徐々に親の行動圏から離れる~追われる? (結構けた

ましい泣き声と行動が見られる (親に追われたのか、初冬に大麻の鉄道林での目撃情報もある)

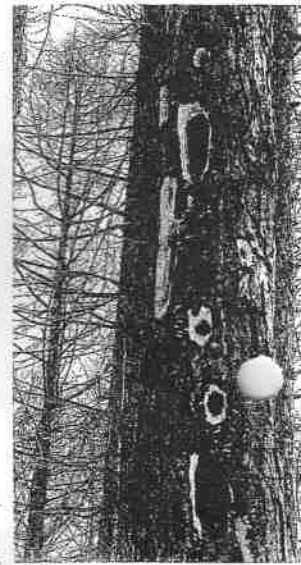
クマゲラ



クマゲラに見たクマゲラの巣内下の生物

(東大北海道演習林, 1974~91年)

餌の種類	育雛期	夏期	秋 期		厳寒期	出現頻度
			古株など	新枯れ木		
ムネアカオオアリ	+	++++	++++	-	++++	++++
トビイロケアリ	++++	-	++	-	-	+++
カミキリムシ幼虫	±	-	+	+++	+	++
アカヤマアリ	-	-	+	-	-	+
ヤツバキクイムシ成虫	-	-	-	+++	-	+
ゾウムシ幼虫	-	-	-	+	-	±
カッコウムシ成虫	-	-	-	±	-	±
ハチの一種	±	-	-	-	-	±
植物種子	-	-	+		±	±



クマゲラは何故、大きな木のある深い森に住んでいるのか、生きられないのか少し理解できました。

北海道に於いても、開拓使が明治2年に設置された当時の人口はおおよそ6万人、143年が過ぎた今約50万人在 (平成23年7月末)、開拓のため入植した当時は、空も近くの間も目えない位の深い森でした。開発がむとみに、幾度かの台風による災害、戦時資材調達、戦後の緊急入植などにより、現在の姿となっています。

クマゲラは、進化の過程で主な食糧を大木のある深い森に生息するアリとして、住む場所を求めてきました。開発が進み、住むところがこのように狭められることは、クマゲラの計算には入っていなかったことでしょ

しかし、現状は急速に森林が少なくなっています。彼らクマゲラは、急に生き方の方向を変えることは来ないことから、私達「人」が緑を守っていかなければと、あらためて思いました。

のほかにはごさいますまい。それが現代文学が有する美点なのではありませんまいか。私がイギリスの外務大臣であった数年前までは、休暇というものを、ほとんど容易に得ることはできませんでした。休暇を得たといたしましても、ごく短く、貴重なものでありました。仕事はハードで、くたくたに疲れ、性に合いませんでした。そのようなときに、田舎のわが家の書齋に、気晴らしのための三冊の書物を置いておくという、良案を思いついたのであります。その一冊は、過去の時代における大いなる事件や大いなる思想を取り扱い、いかなる時代におきましても対応しうる大著の一冊としたのであります。そのような大著の一例といたしまして、ギボン (Edwrd Gibbon; 英国の歴史家、1737~94) の『Decline and Fall of the Roman Empire (ローマ帝国衰亡史)』を、私は挙げたいと思えます。卓越した雰囲気をかもしだし、党のための政治活動やお役所仕事という心配の種に対しまして、率直に意見を述べてくれる、きわめて興味深い一冊の書物なのであります。このような書物は、別世界へと人をいざない、喜びだけではなく、心のやすらぎをも与えてくれるのであります。「大いなる静寂の書物を愛す」と、テニソン (Alfred Tennyson; 英国の詩人、桂冠詩人、1809~92) は語ったと伝えられております。すぐれた書物は喜びや心のやすらぎを与えてくれるだけではごさいますんでして、余暇の取り組みに対するすぐれた観点をも示唆してくれるものであります。ギボンは退屈であると仰言った方がたに対しまして、私は警告を発しなければなりません。燦めくウイットに富んだ方でありませリダグン (Richard Brinsley Sheridan; アイルランド生まれの英国の劇作家・政治家、1751~1816) は、「ギボンの才気煥発なる作品」と評することによりましてギボンに対する敬意を表した、有名な講演によりまして、私はギボンに思い至りました、と私の友人は言っております。ギボンは「大作をものした男」と称されるべきであろう、とシェリダグンは語っております。みなさん方がギボンと同じようなお考えをお持ちになりましたならば、さぞおもしろい何かすぐれた文学作品をものにしうるのではありますまいか、と私は思っております。それから後は、そうすることを自ら望むすぐれた多くの作家が輩出するのではありますまいか、と。おもしろく、ためになる古い書物には、われわれの注意を喚起する、きわめて多くの示唆に富んでいるものであります。それが、書名がよく知れわたっている書物なのであります。さらには、人間の知力の連峰にそびえる崇高なる頂のように、すぐにそれと知れる書物なのであります。

私の手もとに置くべき二冊目の書物は、またしても、次世代から次世代へと承認され、継承されてきた古い小説なのであります。三冊目は、軽いものであらうと、本格的なものであらうとかまわない

のでありますけれども、なんらかの近代の書物なのであります。とは申しましても、喜びも得るところもないこの書物が、あまたに存在しているわけでもあります。ひまな時間が十分にはないわれわれにとりましては、実際に読んでみるために多くの時間を費やすということはできかねるのであります。ほとんど時間的に余裕のない生活をしいられておりますわれわれにとりましては、有益ならざる近代の書物をためしに読んでみるために、ほんの少しの時間でありましても浪費することは、許されざることなのであります。そこで、尊敬しうる聡明さを持ち、読む書物の好みがぴったり自分にあつていような二三の友人と親交を深めるということは、価値あることなのであります。かれらが読み、そのすばらしさに心を動かされた近代の書物の表題を、時折かれらから教わるのであります。私は読書をする時間があまりにも少なすぎました。それゆえに、私の助言はいかにも非論理的であつたように思います。いずれにいたしましても、私はここでみなさん方に、一冊のすばらしい現代小説をおすすめしたいと思ひます。表題は、『The Bent Twig (曲がった小枝)』です。ドロシー・キャンフィールド (Dorothy Canfield) という女流作家の小説であります。彼女がアメリカ人であるということにつきまして、みなさん方がいっさい異議を差しはさまないであらうということ、私は断言することができます。いずれにいたしましても、この書物は、最近とみに人の目にとまるようになってまいりました小説作品といたしまして、特に優れた芸術上の仕事の一つであろう、と私は思っております。おそらくまだ多くのほかの作家もいるのであらう、と私は思っております。もしもみなさん方お一人お一人が、私がいたしましたように、読むべき一冊の書物を見いだされまして、半ダースほどの共感する方がたと出会われましたならば、みなさん方は、ごく近い将来のための事前準備をなさつたのと同じことになるのであります。

読書につきましての終わりにあたりまして、私からいま一つのご提案を、ここで申し述べさせていただきたいと存じます。人生におきまして、すべてを最良あらしめますように、レクリエーションとしての読書には、ちょっとした計画が必要であらうかと思っております。これから休暇をとらうと思つておるときには、その日がやってくるまでに、あらかじめだれしも計画を立てますよね。したいことや、行きたいところをあらかじめ調べておくことは、あたりまえのことなのであります。いかにその休暇を有効に過ごすかということ、そのことによりまして、すっかり準備がととえられるわけでございます。とつぜん休暇があてがわれまして、それを受けざるをえなかつたとしますならば、その休暇のほとんどを無駄に過ごしてしまうことは必定なのであります。それにいたしましても余暇とい

うものは、まったく行きあたりばつたりにやってくるひまな時間なのでもあります。ゆめゆめ余暇がふいにやってきませんよう、祈るほかはございません。そのような余暇がふいにやってきたときのために、ご自身の考え方やご自身の経験にもとづきまして、あるいは、ご友人が推奨し、ご自分が読みたいとお思いになった書物のリストをお作りになることは、一案かと存じます。その書物のうちの一二冊をつねに手もとに置き、その書物のことをたえず思いながら、それを読むあるかなきかのその機会を待ちこがれるのであります。手間のかかる、その計画を立てるということをおこたったがゆえに、人は、読書をする習慣と楽しみとを失いかねないのであります。夕暮れどきの暇なときに、あるいは長距離の鉄道の旅におきまして、あるいは雨降りに、あらかじめそれを見越した一冊の書物が手もとにないことに気づき、とくに読みたいというわけではない新聞や雑誌を手取る、ということをごだれもがなすあやまちなのであります。すなわち、人の心にささげられるべき書物や真に欲する書物が手もとにないということが、人を読書から遠ざける一因となるのであります。あらかじめ計画を立てるという習慣は、読書の楽しみを真に追求するために欠くべからざるものであることは、スポーツや旅行や競技、あるいは人生におけるなんらかのほかの楽しみのための計画と、本質的にはなんら違いはないのであります。私にはスポーツが大好きな友人たちがおります。かれらは、魚釣りや銃じゆう猟りようのようなことをする川に、前もって長い時間いるのが好きなのであります。かれらは、獲物を追跡するのです。旅行が大好きないま一人の友人がございます。かれは、行こうと思っている場所や見物しようと思っているものについて、前もって何か月も計画を練るのであります。このように、あらかじめ考えたり、計画を立てるということをしなければ、かれらは、真の喜びをかちえることはできないとさえ思っているのであります。それは、読書にとりましても、まったく同じことなのであります。ひとたび計画を立てる習慣を身につけたならば、われわれが望んでいるものを、いよいよ手にすることができるといふことなのであります。すなわち、われわれが、常に困難を回避し続けるということは、ずっと読むことを待ちあぐんでいた幾冊かの書物を、ついに手にすることすら難しくさせるということなのであります。とは申しましても、まずは最初になすべしと心に決めて、楽しみにして待つことが、ついにはその書物を手にすることをかなえさせる、ということに間違いはないのであります。でございます。

私はこれまで休暇のための計画につきましてお話をしてまいりましたけれど、ここで、ルーズヴェルト大統領 (Theodore Roosevelt ; 1858~1919、米国第26代大統領(1901~09)、共和党、Nobel平和

賞(1906)がいかに入念に休暇のための計画をお立てになったか、という一つの事例をお話したいと存じます。数年前のこと、私がロンドンの外務省におりました折に、当時、ワシントン駐在の英国大使でありましたブライス氏から、一通の手紙を受け取りました。任期が明けしだいすぐに旅行をしたいとルーズヴェルト大統領が仰言っております、ということでありました。大統領は、アフリカを旅行し、ヨーロッパを訪問したいと仰言っております、しかる後に、ロンドンを訪問するということでもあります。鳥たちがいっせいに囀る春にイングランドへ行って、鳥の歌声をお聞きになりたいと仰言っているのであります。大統領は、その休暇の時季を、分刻みで計画なさっているのであります。このことにつきまして、大統領は、イングランドの鳥の囀りに精通しているどなたかが、田舎をいっしょに歩きまわり、歌声が聞こえたならば、その鳥がいかなる鳥であるかを教えていただけるよう手筈をととのえていただきたい、と望んだのであります。それは、休暇に先んじました周到な計画によります、大そうすてきな希望なのであります。世界でもっとも強大な国家の行政政府の元首ともあろうお方が、鳥の囀りを聞きたいというような単純で健全な希いをお持ちであるということは、私には大そう好ましいことに思われました。すぐに私はブライス氏に宛てて、ルーズヴェルト大統領がお越しの節には、大統領がご所望になりますいかなることに対しましても、私が喜んでその任に当たります、と書き送ったのであります。鳥の歌声に精通いたしますことは、アメリカ合衆国大統領としましての必要条件ではないのと同様に、ロンドンの英国外務大臣にとりましても、必要条件ではございません。あえて専門家を招聘するの必要を感じずともなく、あたかもそれが公務の一部でもあるかのように、そのささやかな問題を、われわれの間で満足のいくように手配をすることができましたのは、偶然にもおもしろい趣味の一致があったからにほかならないのであります。

時は移りまして、大統領の任期が明けますと、すぐにルーズヴェルト閣下はアフリカに旅立たれました。そして、幾頭もの大物の獲物を銃胤したり、アフリカを旅行したのであります。つぎに、スーダン、エジプトを経てヨーロッパにいらっしゃいました。ルーズヴェルト閣下の光栄に浴しまして、ヨーロッパの主要各国が沸き立ちました。イングランドも、ほかの国にまさるとも劣らぬ歓迎ぶりであったのであります。ルーズヴェルト閣下は、大いなるご計画をなされましたあらゆる場所におきまして、国の頭官、貴族の地位にあります方がたによりまして準備されました、それはそれはすばらしい歓迎会によりまして、ご歓待されたのであります。閣下がイングランドに到着されます以前から、ヨーロッパの新聞各社はそのこ



とでもちきりでありました。2年ほど前にお話をいただきました、イングランドの鳥の歌声を聞くためにちょっとした散歩をなさるといってお考えなど、国の重大事に紛れましてすっかりお忘れになったのではありますまいか、と私は思っておりました。ところが、あに  
園らんや、決してそうではなかったのであります。私の方から思い出されますように、特になにかをしたということもなかったにもかかわらず、ロンドンでルーズヴェルト閣下のご接待を仰せつかっておりまして、イングランドの私の友人から知らせが参ったのであります。この度のお約束はとどこおりなく進行しておりまして、閣下は、その実現のための時機が見いだされますことを切に願っております。このようにしたためられましたお手紙を、閣下は、私の友人に書き送ったということでありまして、ロンドンに到着後すぐに私はルーズヴェルト閣下とお会いしました。当日、所定の時間にはすでに手筈がととのえられておりまして、われわれはワーテルローの停車場で落ちあつたのであります。われわれは、新聞記者に同行しないようお願いしなければなりませんでした。それは、閣下に対してなんらかの影響を与えることを懸念してというよりも、鳥がそれほど人に馴れてはいないという理由からなのであります。と申しま  
すか、鳥は公人よりもずっと内気なのでございます、と私といたしましては申しあげたいところなのですけれどもね。それゆえに、写真を撮られることや、触れんばかりに近づいてインタビューされることをほんとうに嫌っているのであります。しかも、それが避けがたいことなのですから、なおさらです。しかるに、閣下と私は二人きりにならざるをえなかつたばかりではなく、できるだけ目立たず、人目につかずという方針によらざるをえなかつたのであります。

そういうわけで、われわれは二人きりで出かけてまして、ほぼ20時間のあいだ、世界から姿を消したのであります。われわれは、汽車である田舎へ行きました。そこの停車場に車を待たせておいたのです。それからわれわれは、ハンプシャー州（イングランド南部の州）のティッチボーンという小さな村に向かい、正午をちょっと過ぎた頃にそこに着いたのであります。ティッチボーンというその村にはまた、ティッチボーンという一族が住んでおりました。その村の古い教会には、ティッチボーン一族のご先祖様の横たわつた彫像が御神体として安置されておりました。ジェームズ1世の時代にご存命であつたティッチボーンの奥方ということでありました。その彫像には、「このチャペルにわが妻とともに眠らん」という言葉が刻まれてありました。そのチャペルは、ヘンリー1世の時代にティッチボーン一族のご先祖様によって建立されたものであります。およそ800年間にわたりまして、一つの土地に、一つの家族

が住んでいたという、絶えざる歴史が説き明かされているのであります。いずれにいたしましても、われわれがその教会に立ち寄る機会を持ったという、それを顧みる話は、もういたしますまい。さらに、はるかいにしえにすでに存在しておりました鳥の歌声を聞くために、われわれはやって来たのでありますから。それは、中世の物語が生まれる以前のイングランドの住民が耳にした鳥の囀りと、そっくり同じものに違いないのであります。その鳥の囀りは、太古の昔より少しも変わることなく聞こえているのであります。歴史が単なる知識や記録ではないように、人類の先祖が聞きなしてきたに違いない鳥の歌声を、われわれはおそらく、世界のいかなる場所におきましても、いま、それを聞くことができるのであります。

実は、私は、この度の散歩を少しく懸念していたのであります。この1910年にルーズヴェルト閣下がイングランドにいらっしゃるまでは、個人的な面識がなかったからであります。ほんとうに私は考えあぐねていたのであります。「やはり、おそらく閣下は鳥のことをさほど好きではないのではございませうか。1時間も歩けば、あるいは、もうたくさんとお思いになるのではございませうか。もしもそれがあたって、鳥をお好きではないとすれば、閣下は単に私に引きずりまわされているということになりかねないではないか。きわめて長い時間にわたって十分なおもしろさを見だしえないままに、終わることになってしまうのではございませうか」と。閣下の大なるおもてなしをせんがために、私はすっかり鳥をあてにしていたのであります。もしもそれがうまく運ばないということになれば、私の頼みの綱が断ち切られるということになるからであります。ともあれ、閣下のお好きな鳥の名をお伺いするという、忘れべからざることさえ、私はすっかり失念していたほどなのであります。ほどなくいたしまして、ルーズヴェルト閣下が鳥に対しまして、並はずれた、しかも永続的な関心を寄せていらっしゃるといふことのみならず、鳥に関しまして、驚くべき知識をお持ちでいらっしゃるといふことに気づかされたのであります。私はイギリスの鳥に関しましては、いくらか価値のあることを存じておりますけれども、アメリカの鳥におきましては、悲しいかな、ささやかな、つまらないことしか知らないのであります。閣下は、アメリカの鳥につきまして、多くのことをご存じでありましたけれども、そればかりではございませんでして、私がイギリスの鳥について知っておりますことよりも、さらにイギリスの鳥につきましてもよくご存じだつたのであります。閣下は、鳥たちの歌声を聞くために、多くの機会を持ちえたわけではございませうまい。そのことを鑑みますれば、みなさん方が、ほかの方法によってというよりはむしろ、鳥たちの歌声に聞き耳を立てることによりまして、鳥の歌声に



関する知識をお持ちになるということは、比較的かんたんにおできになることに相違ありますまい、と私は思うのであります。

われわれは歩き始めました。そして、鳥の声が聞こえるやいなや、私は閣下にその鳥の名前を申しあげました。ところが、とりたててその鳥の名前を申しあげるには及ばないということ、私はすぐに理解いたしました。まったく閣下に申しあげる必要がなかったからであります。閣下は、その鳥がお好きで、よくご存じだったのです。その鳥を観察することは、もはや閣下にとりまして必要なことではなかったのであります。その鳥の種類、その鳥の習性や姿にいたるまで、すっかり閣下はご存じだったというわけです。閣下がまさに手に入れたいとお望みであったのは、鳥の声を聞きなすほどの完全なる知識なのであります。とは申しましても、鳥の声を聞き分けるための実質的な訓練を、閣下はすでになさっていたのであります。それは、鳥の声を聞くために、多くの時間を費やすことなく身につけることは、困難であるほどの知識でありました。そのきわめて完全なる知識を身につけるための時間を、ご多忙な生活におきまして、いかにして閣下は見いだしえたのでありましようか。ほとんど想像することすら不可能なことであります。それにしましても、疑うべくもなく訓練をし、知識を有するお方がそこに存在したのであります。閣下は、私がこれまで知っております、鳥の声を聞き分けるきわめて完璧なる訓練を受けられた方のお一人でありました。と申しますのは、三羽か四羽の鳥が同時に囀っておりましても、その鳥の声を聞き分け、それぞれの鳥の声を識別なさったからであります。そうして、一つひとつ識別なさった鳥の声を仰言つて、その鳥の名前をお尋ねになったのであります。それからもつと後になりまして、われわれは大そうめずらしい鳥の声を二度にわたって聞きました。二度目のときに閣下は、先ほど聞きなした鳥であることを思い出されまして、ご自分からその鳥の名前を仰言つたほどであります。

閣下は、鳥の声を聞き分ける訓練をお受けになっていたばかりではございませんでして、鳥の声を識別する鋭い感覚をお持ちになっておりました。閣下は、たちどころに鳥の声の善し悪しを述べられまして、われわれが聞きなした鳥の囀りのうちでもっともすばらしい歌声を持つイギリスの黒歌鳥 (black bird; ブラックバード) の声を、たちどころに聞きなしたのであります。私も、黒歌鳥の歌声を聞きますと、いつも閣下と同じような感想をいただいたのであります。私はいまだに、その歌声を聞いたことがございませんので、アメリカの鳥の歌声よりも優っているのではないのでしょうか、とは申しあげられませんでした。また、ルーズヴェルト閣下は、イングランドで耳にしうるいかなる鳥の歌声よりも優れた、一二羽のアメリカ

方の鳥の歌声があるというお考えをお持ちであるということに、私は気づいたからであります。ともあれ、イギリスの黒歌鳥の歌声につきましては、閣下が仰言っておりましたご意見を、過日、ニューヨーク市の博物館が所蔵しております、チャップマン博士が著しました書籍によりまして、立証されていることを私は確認したのであります。チャップマン博士は、第一章におきまして、イギリスの鳥について書いているのであります。そこで、その“妙なる声色”がゆえに、黒歌鳥の歌声がいかに優れているかということ、論じているのであります。ルーズヴェルト閣下は黒歌鳥の歌声がお好きで、かつてその賞賛の声を聞いたことがないことにつきまして、ほろどんどご立腹なさっていたほどであります。だれもかれもが歌鸛の歌声についてだけは論ずるのであります、と閣下は苦々しそうに仰言っていたのであります。歌鸛の歌声だけがとびきり評判だったのであります。それにひきかえまして、黒歌鳥の歌声はまったくそうではありませんでした。歌鸛の歌声よりも黒歌鳥の歌声のほうがよほど優れているというようなことが、しばしばというほどではないにいたしましても、人びとの口の端にのぼることはあったことにはあったのでございます、が、であります。閣下は、その不当な扱いの理由を知りたいとお思いになりました。閣下はしきりに自問し、また、私にお尋ねになりました。おそらくその黒歌鳥という鳥の名前が世評を損ねてきたに相違ありませんまい、というお考えをとうとう閣下はお洩らしになりました。年間をとおしまして、黒歌鳥よりも歌鸛の囀る期間のほうがずっと長いということと、歌鸛は大そう目立つ歌い手であるということによりまして、また、鳥の歌声につきましてその差異を識別することに関心を寄せるほどの感覚をお持ちの御仁がまことに少ないということが、その実質的な理由ではありますまいか、と私は考えたのであります。

閣下の鳥に対する好奇心と知識につきまして、いま一つの実例を申しあげましょう。われわれが椋の木の下を通り過ぎようとしたそのとき、木の高みよりかすかな歌声が聞こえてまいりました。われわれは立ちどまり、菊戴の歌声でありますと私申しあげました。その鳥が可愛らしい歌声で繰り返し囀っているあいだ、閣下はそれはそれは注意深くお聞きになっていたのであります。と、そのとき、閣下は仰言いました。「かつてアメリカで聞いた鳥の歌声と、そっくり同じように思うのだが」と。ほんとうにそれが、アメリカのある鳥の歌声とそっくりであると閣下が仰言った、唯一のイギリスの鳥でありました。その後しばらくいたしまして、私はロンドンの博物館で、鳥の専門家の方とお会いしまして、そのことをお話しました。そうしますと、菊戴の歌声は、イギリスとアメリカ両国がともに有する唯一の歌声ではないでしょうか、と、ルーズヴェルト

閣下が仰言ったことを、かれは裏づけしたのであります。閣下が持ちえましたその精密かつ正確な知識にもとづきます、きわめて驚くべき事実につきまして、私はしばし思いを巡らせたほどであります。鳥のことに精通しておりますのは、ロンドンにおきましては、鳥の専門家の専売特許にほかならないのであります。ところが、ルーズヴェルト閣下の知識はと申しますと、ほんの片手間に習い覚えしました付帯事項に過ぎないのでありまして、とうてい閣下の人生においてなしえましてご功績の一部とはなりえない、その<sup>はんちゆう</sup>範疇を越えたものであると思われるのであります。イングランドでわれわれが目にする、それはそれは小さな鳥であります菊戴が、北アメリカという広大な大陸におきまして同じように目にしうる唯一の鳴鳥であるということに、そのときいかにも不思議な感じがいたしましたことを、私はいま思い返しているところであります。

いずれにいたしましても、ほかの国におきましては、この見地はまったく違ったものになろうかと思えます。われわれは国政に関する質問のみならず、まったく異なる観点によります博物学的な付帯事項に耳を傾けることによりまして、自分が住んでいる海洋とは異なる場所にある国を再認識したと言えるようです。ついこの間のことでありますけれど、ワシントンからさほど離れてはいないところで、私は物思いに沈んでおりました。私がいまおりますところは、いかに大国であるかということ、しみじみと思っていたのであります。いかに大きな川が流れていることでありましょう。いかに広漠たる広がりなのでありましょう。この国のとほうもない大きさからくる感銘が、私の心のなかをあまねく領する思いでいっぱいになっていたのであります。そのとき幸運にも私は、菊戴に関する付帯事項を思い起こすことができたのであります。当然のなりゆきといたしまして、グレートブリテンのようなちっぽけな、それはそれは小さな島の方へと、再び自らの思考を取り戻すことができたのであります。グレートブリテン島では、海へと転落することなしに15時間以上ものあいだ、直線軌道を時速50マイル(約80.47km/h)の急行列車に乗りまして、東から西へ、あるいは北から南へと旅行することなど、だれにもできないのであります。けれども、この国が有しますそれはそれは可愛らしい菊戴の囀りとまったく同じ、唯一の囀りを、われわれは有しているのであります。

われわれはともに、ささやかな付帯事項をひっさげまして、大いなる楽しみをもたらす散歩をしたのであります。歩行者用の小道からそれまして、われわれはほとんど川の流域に沿って歩きました。それはそれはきれいなところでありまして、胸のわくわくするようなことなどとうてい起こりえない、大そうゆったりとした気持のよい田舎でありました。幾年も前から何度もくり返し歩いたことのあ

る、胸のわくわくするようなできごとなどとうてい起こりえないばかりではなく、付帯事項のことさえ忘れて、私のかつて知ったる小道を、われわれはともに歩いていたのであります。そのとき突然、われわれは立ち止まらざるをえないことに気づきました——小道に水が溢れていたのです。雑草がその流れのかたわらで、水を堰きとめていたのです。乾いた小道のかわりに20ヤード(18.29m)ほど、目の前の水に浸かった小道を、われわれは歩かざるをえませんでした。水かさはさほど深くはありませんでした。もちろんわれわれの膝頭<sup>ひざがしら</sup>を越えるということはありませんでした。けれどもわれわれの足どりでは、それほど先に進むことができませんでした。とにかく私は、そのためのなんの準備もしていなかったからであります。私は、「このままずっと水のなかを歩いていってもかまいませんでしょうか」と閣下にお尋ねしました。それに対しまして、当然「できうればそうしたくはありませんがね」と、閣下はお返事をなさったのであります。それにもかかわらず、われわれはびしょぬれになりながらも、ずっと水のなかを歩き続けたのであります。しかも、正午から日暮れまでのあいだは、またわれわれが歩くことができくくらいまで、乾<sup>は</sup>したのであります。それ以前には、このようなことが起こったためしはございませんし、それ以後もまた、このようなことが起こったためしはございませんでした。ルーズヴェルト閣下のまわりに、付帯事項として演出された、ある種の磁力が引き起こされたのではありますまいか、と私は考えたほどであります。

谷を下りまして、数マイル歩いた後に、われわれはある村の宿屋に待たせておいた車に乗り込みました。そして、ニューフォレスト(イングランド南部)まで車で行きました。とは申しましても、そこはもうすでに800年以上も経っている原始林なのです。われわれはまもなく、まだほとんど開墾されていないヒースの生い茂った荒れた土地のなかをひた走りました。われわれが通り抜けたその辺りは、ほとんど未開の原始林なのです。そこでわれわれは、イッチェンの谷で聞きたいかなる鳥の声とも異なる、二三の鳥の声を聞くことができました。そして、晩の9時ごろにヒースの林を切り拓いたところに立てられました小さな宿屋に到着したのであります。そこでわれわれは夕食をいただきまして、翌朝また朝食をごいっしょしましてから、サウサンプトン港(イングランド南部の港市)へと向かいました。そこからルーズヴェルト閣下は、アメリカへとお帰りになられたのであります。

ルーズヴェルト閣下から、そこでなんらかの大いなる賞賛を得んがためになしたことは、私には一つもございませんでした。アメリカの著名人のお一人として、ごく限られた時間ではあったにもかか

ならず、そのことを閣下はきっとお気づきになられたことと存じます。私が今、個人的な回想といたしまして、ここでみなさん方にお話しておりますことは、たとえほんのわずかではあったといたしましても、閣下の思い出になんらかの寄与をするのではないかと思っております。たとえば、私の個人的な知識や、単に今しがた自分が知りえたにすぎないようなことがらによりまして、私のでっちあげたお話にすぎないといたしましてもでございます。閣下の鳥に関するお話は、著名な詩人の引用句をもちいまして、大そう印象深く述べられておりました。閣下はまた、政治に関するお話もなさいました。閣下の政治に関するお話は、その全体をとおしまして、公共心と愛国心とをもって事をなすこと、というお考えに集約されるように思いました。人生の責務に関するお言葉における閣下の優れた感性によりまして、私は大いに啓発されました。ごいっしょさせていただきましたことによりまして、お伺い知ることのできました閣下の人となりの一端を、私は大いに拝見させていただいたのであります。ひょっといたしますと、閣下の行動におけますほどには、知識におきましていかに卓越した方であるかということが、それほど認知されてはいないのではありますまいか、と私は危惧しております。閣下は、言葉におきましてもきわめて豊かな感性をお持ちの、大いなる行動の人であるということは、どなたもお認めになるところであります。とは申しましても、それを常に公然と賞賛されれば、閣下にとりまして、あるいは大いにプレッシャーとなったかも知れません。行動の人としてと同様に、知識の人といたしまして、閣下に対しまして敬意が払われることは、ごくまれなことではあったのであります。先日、アメリカにおけますお二人のさる高名な博物学の専門家が、私にこのように仰言っておりました。ルーズヴェルト閣下は、おそらくご自身が専門家のお一人とお考えになっていらっしゃるのではないのでしょうか、と。閣下はまた、文学におけますご造詣も大そう深うございまして、しかもこの分野におきましても、端倪すべからざる知識をお持ちの方でありました。閣下がこのように優れた行動の人であると同時に、このように広く正確な知識をお持ちの人であると、みなさん方がお認めになるということは、きわめて難しいことなのかも知れません。私といたしましても、閣下の博物学や文学に関する知識を、たまたま目のあたりにしまして、感嘆させられたに過ぎないわけでありますから。それも、行動と知識の両面におきまして、その確証を直接に得たわけでありますから。そうではありましても、さらに注目すべき閣下の新しい知識に関する分野の存在が、ほかの人の手によりまして見いだされるのではありますまいか、と、私は期待しているところであります。さほど遠くはない昔に、イギリス人の私の友人が亡くなりまし

た。その友人に会うために、かれの業務代理店の方がはるばる海を越えてやってまいりました。私の友人のご遺族のお一人が、その代理店の方にお尋ねになりました。「とても大切なお仕事のために、いらっしゃったのでしょうかね」と。そうしますと、あに図らんや、「いいえ、そうではありません」と、かれは申したのであります。「私は今朝ひどく気がふさいでおりました、それでほんのちよっぴりでもお話をしたいと思ひまして、参ったしだいでございます。ええ、そうでございますとも、私はただ、ほんの2インチばかりでも、氣持をのびやかに感じられるようにしていただけたらなあ、と思つてやってきただけなのです」と。ルーズヴェルト閣下におかれましては、大そうふさわしいのではありますまいかと思われまふこのお話を、私は是が非でもしたいと思つていたところでありまふ。閣下は、もっと偉そうに、もっと強そうに、もっと立派に振る舞われまして、ご自分の存在を印象づけることもおできになつたわけでありまふけれど、そうはなさらなかつたのであります。

さて、私の最後のお話といたしまして、先日、引用されておりましたものをたまたま目にいたしました、ルーズヴェルト閣下が仰言つた言葉をご紹介申しあげたいと存じます。それは、このような言葉であります。「死ぬにふさわしからざる者は、生きるにふさわしからず」。このようなお考えを閣下はお持ちになつていたのであります。人生における喜び、あるいは、人生における責務から身をかわして生きることを、閣下は潔しとはしなかつたのであります。人生における喜びや人生における責務に身を挺するということは、嬉々としてその状況に身を置くということでありまふ。きわめて多くの輩が人生における責務に関して、教訓を垂れているところでありまふ。とは申しましても、人生における喜びをもつて人を薰育し、人生における責務に立ち向かう勇氣を与えてくれるような、なにかをお持ちの御仁はきわめてまれなのであります。この世の美に対する深い愛よりも、さらに広い言葉の意味におけます、きわめて大きな、大そう氣持をさわやかにする、大いに助けとなりますレクリエーションの究極の目的といたしまして、人生における喜びというのは、いかにもふさわしいものと私は考えまふ。そのようにお思ひにならない方もいらっしゃるかと思ひまふ。そのような方に対しまして、私は一言申し述べたいと思ひまふ。ターナー (William Turner; 英国の風景画家、1775~1851) が描いた夕焼けの絵をご覧になりました。一人のご婦人が、「あたしは、これほど美しい夕焼けにお目にかかつたことはございませぬわ」と言ひました。そのご婦人に対しまして、ターナーはこのように仰言つたのであります。「奥さま、このように美しいものをご覧になりたいとはお思ひになりませぬか?」と。さるにても、美を秘めている自然界を少しく感

受なさっているみなさん方に対しまして、私が申しあげたいことは、みなさん方がなしうるあらゆる方法を駆使いたしまして、その感受性をみがき、その教養を高めていただきたいということでありませう。四季を思ってもみてください。春のうれしさを、夏のかげやきを、秋の夕焼けの色を、冬の木々の繊細優美な裸を、雪の美しさを。古代ギリシア人が、かつて海の真砂の数の微笑と呼びならわしました、海の面に浮かぶ光の美しさを。

このような美に対する感受性をもって、われわれが自然を享受することができるならば、われわれは大いに価値あるものを手にしたことになるのであります。自然はきわめて価値あるものであると私は申しましたけれど、それは、なんの費用もかからないのであります。なぜならば、それは、自然が好きならゆる人びとにとりまして、世界のどこにおきましても存在している、喜びのほんの一部にすぎないからであります。自然とは、あまねく万民に向かって開かれた喜びとして、存在しているのであります。自然とは、もしもわれわれがそれが好きになりさえすれば、われわれにとりまして、貴重な財産となりうるものなのであります。しかも、自然を手にするにおきまして、われわれは、ほかの何人からも奪い取るものはないのであります。自然を喜び、自然を手にするには、強欲な心も、嫉妬する心も、掻き立てはしないのであります。自然とは、われわれにとりまして、いつでもそこに存在している価値あるものであります。人生における苦しみを、ほんのわずかではありませう、われわれから取り除いてくれるものなのであります。われわれが退屈でうんざりしているときに、われわれがなにかまちがいを起こしたときに、われわれがちょっとした悩みをかかえているときに、自然の美しさに触れさえすれば、われわれの気分を転換し、気持を明るくさせてくれるのであります。ある老作家によって書かれました古風で趣のある、しかも大それた文章をご紹介しますと思います。それには、このように書かれていますのであります。

「俺は眠る、俺は呑み、かつ喰う。俺は読み、かつよく考える。俺は近くの気持ちのいい野原を歩く、そして見る。大いなる自然の変化の美しさを……言うなればかれは、それはそれはたくさんの愉しみの姿を身をもって体験した男、悲しみやら、ひねくれやらで、生きそこなつた男、すべての希望が断たれ、小さな手のひら一杯の山榎子の棘を握ることを選んだ男なのであった」。

貧乏人と嘲笑されている、いま一人の男のお話をいたしましませう。実はその男は、きわめて単純な方法で田舎をせつせと歩きまわり、田舎の生活と美しさを学び、そして楽しみながら自活するといふ、まさに大いなる財産を持った男であります。かれはかつて、大資本を有する会社の経営に携わっておりました。毎日その会社で働

くことによりまして、年を追うごとに多額のお金を手にするようになっていったのであります。その貧しい男は、大金持ちの男に向かって、こう言いました。「私はあなたよりも、ずっと幸せな人間なはずですよ」と。「どうしてあなたは、そのようにお思いになられますかね、仕事もなさらんで？」と、大金持ちの男はお尋ねになりました。「どうして」ですと、と、貧しい男はくり返してから、言ったのであります。「私はだれも手にしえないような、だれよりも多くの富を、自分みずらが望んで手にしているからなのですよ」と。

ともあれ、レクリエーションを正しく活用することによりまして、われわれが救われますのは、人生におけるこまごまとした悩みにとどまるものではございますまい。自分自身をおし殺したアメリカの国民や、イギリスの国民や、ほかの国々の国民が参戦しました戦争である第一次世界大戦（1914～18）におきまして、いかにしてわれわれは完全なる計画を実行しえたのでありましようか。私は、自らを見失った私自身のお話をしたいと思っておりましたけれども、むしろ偶然に見いだされました私自身のことをお話したほうがよいのではないか、と思うようになったのであります。アメリカにおきましては、理想を掲げ、命がけできわめて短日月のうちに、海を越えて200万人の兵士を戦場へと送り込んだことは、それはそれはみごとなことでありました。アメリカが徴兵をかけましたその地域におきまして、配属されました大陸本土のきわまりなく広漠と広がるその地域におきまして、アメリカの百万人の国民によりまして、われわれイギリス人は、実に大いなる感銘を与えられたのであります。その一丸となった公共心に、その一丸となった愛国心に、そして、第一次世界大戦における連合軍を一丸となって援護せんと望む、アメリカ国民のその思いにであります。人びとは自ら申し出て、食料や燃料を軍隊に供給していたのであります。国土のきわめて広い範囲にまで広がった、百万人を超えなんとするきわめて多くの人びとによるその自発的な活動は、一丸となった理想や、一丸となった公共心の存在を示した、とてつもない一つのお手本となつたのであります。しかも、かれらがなしえました活動によりまして、気づかずにおりました私自身の好奇心や長所が呼び覚まされ、さらには、大いなるなにかが呼び覚まされたという、一つの覚醒が私にもたらされたのであります。

これは、人生における責務から逃れようとはせず、それをよく遇した結果として顕現させた、一つの実例ではありますまいか、と私は思っております。それとともに、みなさん方は、人生における喜びがもたらすなにかによりまして、また、この世の美に対する鋭敏なる感覚、いかにもそれ以上ではないものによりまして、さらには、美に対する愛によりまして、ふたたび大いなる偉業をなしうる



のではないか、と私はご期待申しあげているところであります。私は第一次世界大戦を通しまして、そのような偉業を知ることができたのであります。われわれの意気は、なるほどわが国民のヒロイズムによって喚起されたのであります。とは申しましても、こうむった損害によりまして、われわれはまた、意気消沈させられたのも事実であります。イングランドにおきましては、村落のことごとくまでが攻撃されまして、ほとんどすべての家庭が、悲しみにうちひしがれたのであります。こうむった痛手によりまして思ひは、あらゆる喜びの種が踏みにじられ、将来に対する不安の種のみを残したのであります。それは、まさに読もうとしている一冊の本のページのよう、自分の目の前にくり広げられた光景でありました。このような暗い時代にありまして、季節ごとの美しさをもって変わらずに規則正しく移り変わる自然のなかに、私は大いなるよりどころを見つけたのであります。毎年あやまたずに、しっかりとした足どりで巡ってくる春のように。若葉はいつも変わらぬ新緑の芽を吹き、鳥は歌い、花は芽ぐみ花ひらく。第一次世界大戦におきましても、ついにその影響を及ぼされざる美しさを持つ自然の大いなる力を、私は身をもって感じたのであります。楽天的に自信をよみがえらせ、安心が与えられるような、大切ななにかが失われ、氣力が回復しえないということに気づいた、まさにきわめて凄まじい世界的な混乱から、だれもがしばらく<sup>まぬか</sup>免れんがために、だれもが生きたいと思うところに見いだされた、それは素晴らしいサンクチュアリ（鳥獣保護区域）のような特徴を有していたのであります。まさにとどまることを知らない季節の移り変わり、自然の美しさの永続性というもの、ある大いなるものの現れであったのであります。なにかもが非道で愚かな行為とは限らないという、輝かしい現れであったのであります。人間による過去の不幸な出来事は、なくすることができるのであります。あるいは、<sup>さいは</sup>砕破することができるのであります。一年ごとの移り変わりを、ワーズワース（William Wordsworth ; the Lake District に住み自然を歌った英国の詩人、桂冠詩人（1843～50）、1770～1850）が感じたように、この世の美しさとして感じる事ができるならば、その自然から大いなるものを、われわれは得ることができるのではありますまいか。

見えざるものからの、まことのたより、  
潮の満ち干やとこしえの力によりまして、  
内なる静けさは、そのみ心にまします、  
たえざるそのみ言葉をもて、

ここでわれわれは、実に、希望のみならず、勇氣、元氣、そして

自信をもたらす、レクリエーションの真髄に至りえたことになるのであります。永久不変の偉大さを感じさせ、われわれの心をゆさぶるような優れた音楽、美しい絵画、壮麗な建築物、あるいは、そのほかの何かを通して得られるものと同じような感覚が得られる、なんらかのもの。これを楽しんでいただきたいと存じます。そして、これを愛<sup>いっく</sup>しみ心をお寄せいただきたいと存じます。なお、できうれば、とりわけ自然の美しさを愛<sup>いっく</sup>しむことに心をお寄せいただきたいと思ひます。と申しますのは、自然は費用がかからず、どなたにとりまして、いたるところに存在するがゆえにであります。このような事柄のうちにレクリエーションを見いだしうるならば、人生における責務を負ってなお、実に、大いに余りある人生における喜びをわれわれは手にすることができるのではないかと私は思っております。人生における喜びを見いださんとするときに、人生における責務は決して不利益となるような事柄ではないばかりではなく、対立する事柄でもないのであります。ともあれ、この二つの事柄は、お互いに仲間であり、しかもお互いに相<sup>おぎな</sup>補いあうものとして、その事柄に自ら駆り立てられましたルーズヴェルト閣下のように、おそらくわれわれもなしうるのではありますまいか、と私は考えるのであります。

あとがき

エドワード・グレイ (Edward Grey; 英国の政治家、第一次世界大戦参戦時の外務大臣 (1905~16)、1862~1933) が、1919年にアメリカのハーヴァード大学で行った講演の記録である。

小泉信三の『私の敬愛する人びと』(角川選書)にその内容が紹介された。この講演の後半において、エドワード・グレイが外務大臣のときに米国第26代大統領のセオドア・ルーズヴェルトと二人で、鳥の声を聞くために森に雲隠れしたことが述べられている。雑誌『野鳥』(昭和13年2月号)に、その抄訳が紹介された。これはその『Recreation』(Hanlins Press刊)の全訳である。

なお、終わりに引用されているウィリアム・ワーズワースの詩は、『THE EXCURSION』(邦訳: 田中宏訳『逍遙』(成美堂刊))の第四巻「回復した失意」の一節である。

また、伝記作家エドモンド・モリスの『Colonel Roosevelt (ルーズヴェルト閣下)』(RANDOM HOUSE刊)には、つぎのように描かれているのである。

あるブナ林の緑の音楽的な曲線のあいだを歩いてルーズヴェルトを案内するのを、エドワード・グレイ卿は楽しんだ。外務大臣は、

鳥類についてきわめてよく精通した、並はずれた野外活動家であった。ニューフォーレストの奥にある山あいのあるあちらこちらの水辺の牧草地を歩きまわることができるように、グレイ卿はあらかじめ示唆をもらっていた。ブロッケンハースト（イングランド南部）の近くの田舎に、かれらが夜を過ごした一軒の宿屋があった。サウサンプトン港が、わずかに8マイル離れたところにあった。ルーズヴェルトの奥さんと子どもたちは、そこで翌朝まで別な旅行をし、船着場でルーズヴェルトと落ちあったのであった。

2011年3月28日（月）

小鳥と遊ぶグレイ卿 八巻源三氏より



# 自然観察NOW

野幌森林公園自然情報

2011.9.11 No.5  
北海道ボランティア・レンジャー協議会

## ススキ(イネ科)とオギ(イネ科)

私たち日本人は古来よりススキを身近な植物として愛でると共に利用してきました。山上憶良「萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花 また 藤袴 朝顔の花」と万葉集に詠み込まれ、秋の七草の一つとされる「尾花」はススキの花穂が出ているときの呼称です。あまり話題にされないオギ(萩)と共に屋根葺の材料に使われます。その時は「萱」とよばれます。葉の時は「薄」、「芒」でススキは3つの名前を持って使われています。

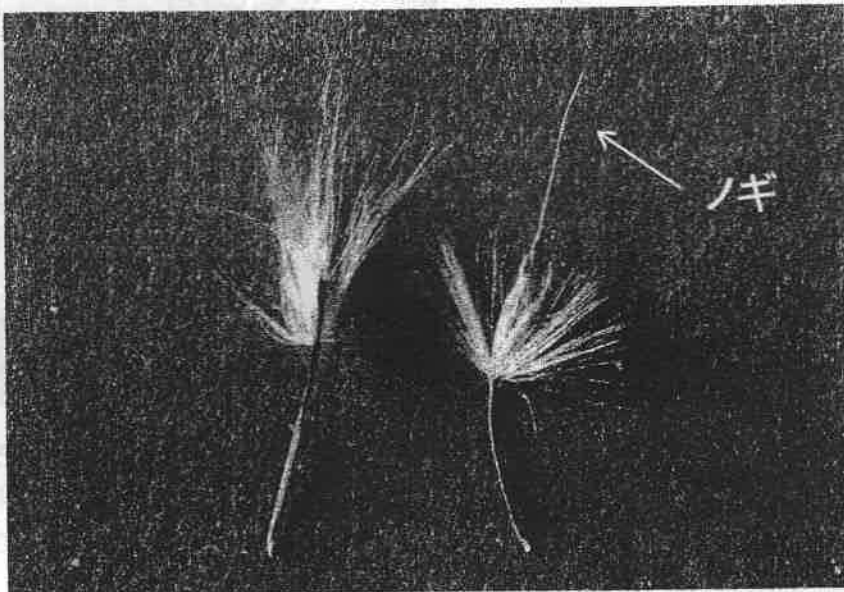
中秋の名月(十五夜)にお団子と共にススキを飾る風習があります。旧暦の8月15日頃はススキの花穂をだす季節です。“銀色に輝くススキ”と表現されますが、花穂はオギの方が銀白色で美しいです。今年はススキとオギを手元でじっくり比較観察してみませんか。

### 「ススキ」

ススキ原は自然の景観というよりも人の手によって作りだされてきました。自然の森林を伐採して開拓した後に出現します。山地や平地、海岸などのやや乾いた草原に株立ちになっています。小穂は2個ずつ対になって花穂につき、基毛は小穂とほとんど同じ長さです。また長い禾(ノギ)があります。

### 「オギ」

湖沼の縁や河岸、湿地などに生える。花期がススキより1ヵ月ほど遅いです。株立ちにならず根茎が横に延びて1本ずつ独立して立ちます。基毛は小穂の3倍以上の長さがあるので遠目に逆光を受けて輝く様子はキラキラと美しいです。



左; オギ  
右; ススキ

10月の観察会予定

(42)

- ◆ 「秋の森の匂いをかごう」観察会  
10月13日(木) 10:15~14:30 北海道開拓の村前 集合(昼食持参)

「トリカブト」

濃い紫色の花は切り花用に栽培され、また必要な薬草であり漢方の処方にも配されています。一方これほど毒性が強い植物はありません。根以外にも茎・葉・花や花粉にも有毒成分は含まれます。もっとも毒性が強いとされるものはヨーロッパ産のヨウシュトリカブトとヒマラヤ、中国に産するものです。日本では約30種あります。そのうち北海道のエソトリカブト、オクトリカブト、東北地方のヤマトリカブトなどの毒性が強いといわれています。かつては他の民族もアイヌの人々も矢毒として利用してきました。

医学の著しく進歩した現在でもトリカブトの解毒剤はいまだに発見されていません。山菜として摘んだニリンソウの中にトリカブトの若葉が混じって中毒を起こす事故も珍しくありません。

誇り高げに生いし草 その葉は青く、美しく  
 医学に知らるるトリカブト この毒草の地下の根は  
 神の手ずから植えしもの 人をまどわすこと多く  
 墓場にまでもみちびきて 黄泉の臥床に送りこむ

(チェーホフ『シベリアの旅、サハリン島』神西清訳)

これは1890年チェーホフがここを訪れたとき、彼に渡された請願書にそつとはさみ込まれてあった一流刑囚の詩でありました。囚人は何を訴えたかったのだろう。

「キク」

キクはサクラ同様国花ともされる日本の代表的な花です。古く中国では旧暦9月9日を重陽といい、この日に菊酒を飲んで邪気を払い、延命長寿を願う行事がありました。これが日本にも伝わり、「重陽の節句」、または「菊の節句」となりました。古来より観賞用として栽培されるほか、料理用、薬用とされる食用キクもあり、野生種、園芸種とも多品種です。日本に野生するキク科キク属は14種です。

この季節野幌森林公園でもエゾゴマナ、オオアワダチソウ、セイトカアワダチソウ、オオハンゴンソウ、エゾノコンギク、ユウゼンギク、ネバリノギクなどキクの仲間がいろいろ咲いています。

ここで **稔りの秋** の代表で私達の重要なおコメ「イネ」についてのクイズです：

**Q:** 一粒のおコメは、春から秋の六ヵ月間で、何粒に増えるでしょうか？

春に一粒のイネの種をまけば、やがて芽を出し、すくすく成長し、一株のイネに育って秋にはおコメが収穫できます。

では春の種まきから秋の約六ヵ月間で、一粒のコメは何粒に増えるでしょうか？

**A:** 約 600粒、 **B:** 約1600粒、 **C:** 約5600粒

\* なお答えは交流館に提示されています。

『クイズ植物入門』 田中修著 より



～ 事務局便り ～



<お願い>

- ① 新しい年を迎えて会員の皆様も各地での行事の計画をしていることと思います。もし可能であれば「エゾマツ」にその行事案内をお知らせ下さると有難いです。興味のある会員が参加できますし、会員の交流も生まれると思います。よろしくお願いいたします。
- ② 昨年の北海道ボランティア・レンジャー育成研修会受講後の新規会員で会員申込み用紙に書かれたアドレスが読みにくくメーリングリストに登録出来ない方がいます。メーリングリストが配信されていない方は事務局へメールを送信して下さい。

北海道ボランティア・レンジャー協議会

事務局 室野文男

〒004-0002 札幌市厚別区厚別東2条5丁目17番1号

自宅 011-897-7186 携帯 090-5957-9297

E-mail: [fum-murono@hokkaidou.me](mailto:fum-murono@hokkaidou.me)

URL: <http://hokkaidou.me/volaren/>

<お知らせ>

- ① 観察会は毎年、同時期・同コースで開催されますので前日の下見において内容が固定化しているように見受けられます。昨年からより充実した下見としてテーマを持って話題を提供して下さい方に講師になっていただき観察会のコースを巡ることにしました。ベテラン、新会員共に沢山の話題を共有しながら自然にふれあい、スキルアップが出来たらと願っています。今年度は残すこと以下の2回です。

2月11日(土)	加納勝義さん	「中学生が学ぶ植物分類」
3月24日(土)	成田伸一さん	「地形と土壌」

## 編 集 後 記

- ・表紙は熊野さんが「手稻ひだまり公園」で“コジマエンレイソウ”をスケッチしたものです。
- ・清水利章さんの原稿は5月頃いただいたものですが、夏季号には総会報告、秋季号には観察会の記事などが多く、掲載できませんでした。今回、力のこもった大きな論文を掲載します。英国の政治家・外務大臣のグレイの「Recreation」を、達意な名文で訳されていますので是非読んでみてください。
- ・今回も多くの原稿をいただきありがとうございます。今号に掲載できない原稿もできてしまい、申し訳なく思っています。平取の川村さん、下見会での原稿など、又オホーツク支部の機関誌「流水」など力作ぞろいです。3月号に是非、掲載したいと考えていますので了解をお願いします。
- ・牧さんの力作、クマゲラの生態の写真、カラー印刷で中間に掲載しています。
- ・札幌市の松田ハル子さんの原稿掲載、遅れてすみません。(私の不手際で)
- ・**今年は役員の改選の年です——是非 自薦、他薦で候補の擁立を**  
役員を長くやっている人も多く、改選してほしいという意見もあります。  
新しい人にも積極的に参加してもらって活力ある会にしていきたいものです。  
なお、役員の立候補に関しては事務局長の室野さんに連絡をお願いします。
- ・会長からの誘い、育成研修会の受講者の加入など、約200人になる大きな組織となりました。今年も力を合わせて更に市民の期待に答えられる活動をつづけていきたい。
- ・次号100号は3月下旬発行予定です。原稿は3月15日まで広報部佐藤 までお願いします。年4回発行の機関誌も25年間続けて、遂に百号となります。

『エゾマツ』 2012年1月26日発行  
春季号 99号  
会長 春日 順雄